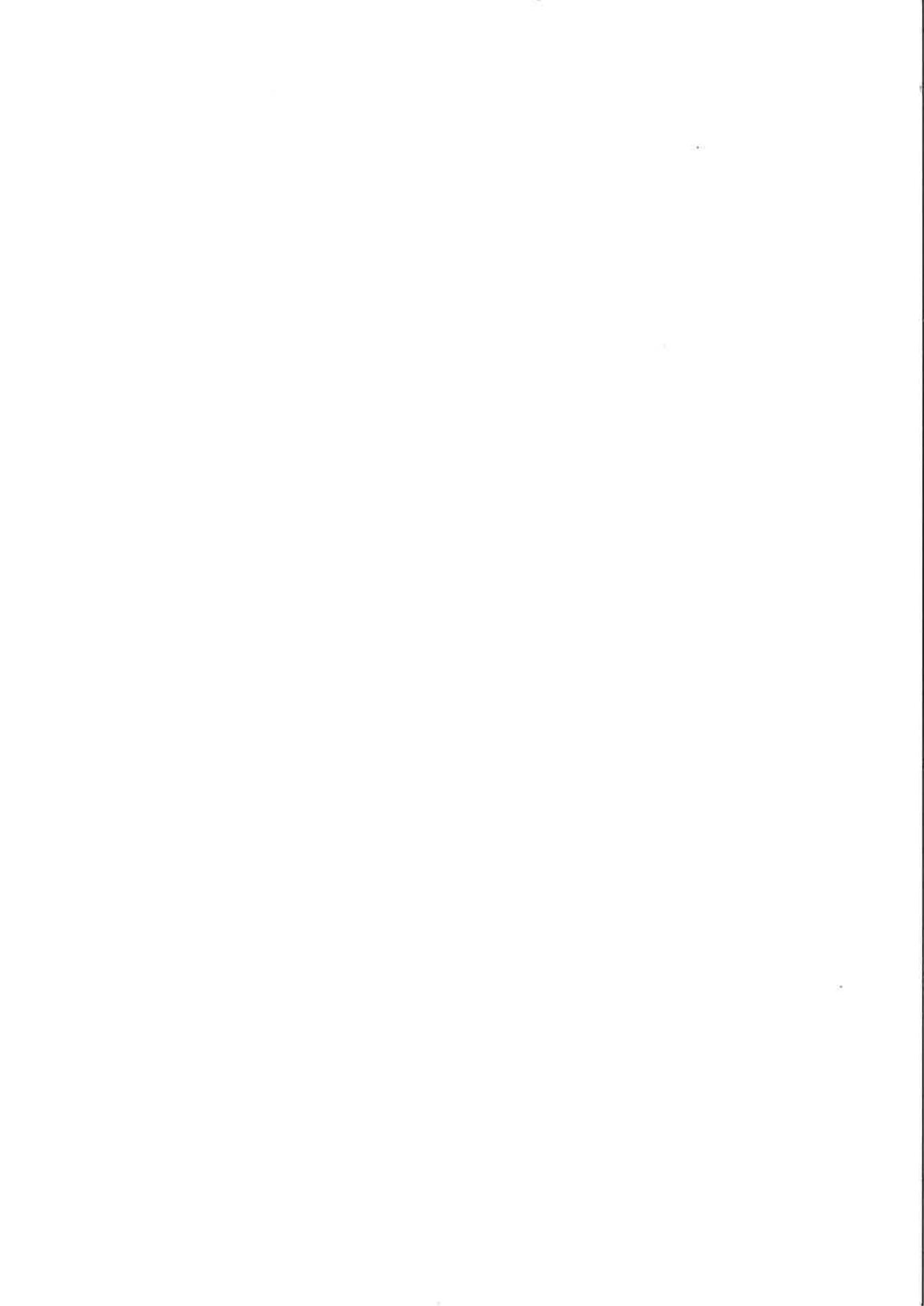


松浦市文化財調査報告書 第11集

# 松浦市内遺跡確認調査(1)

1 9 9 4

松浦市教育委員会



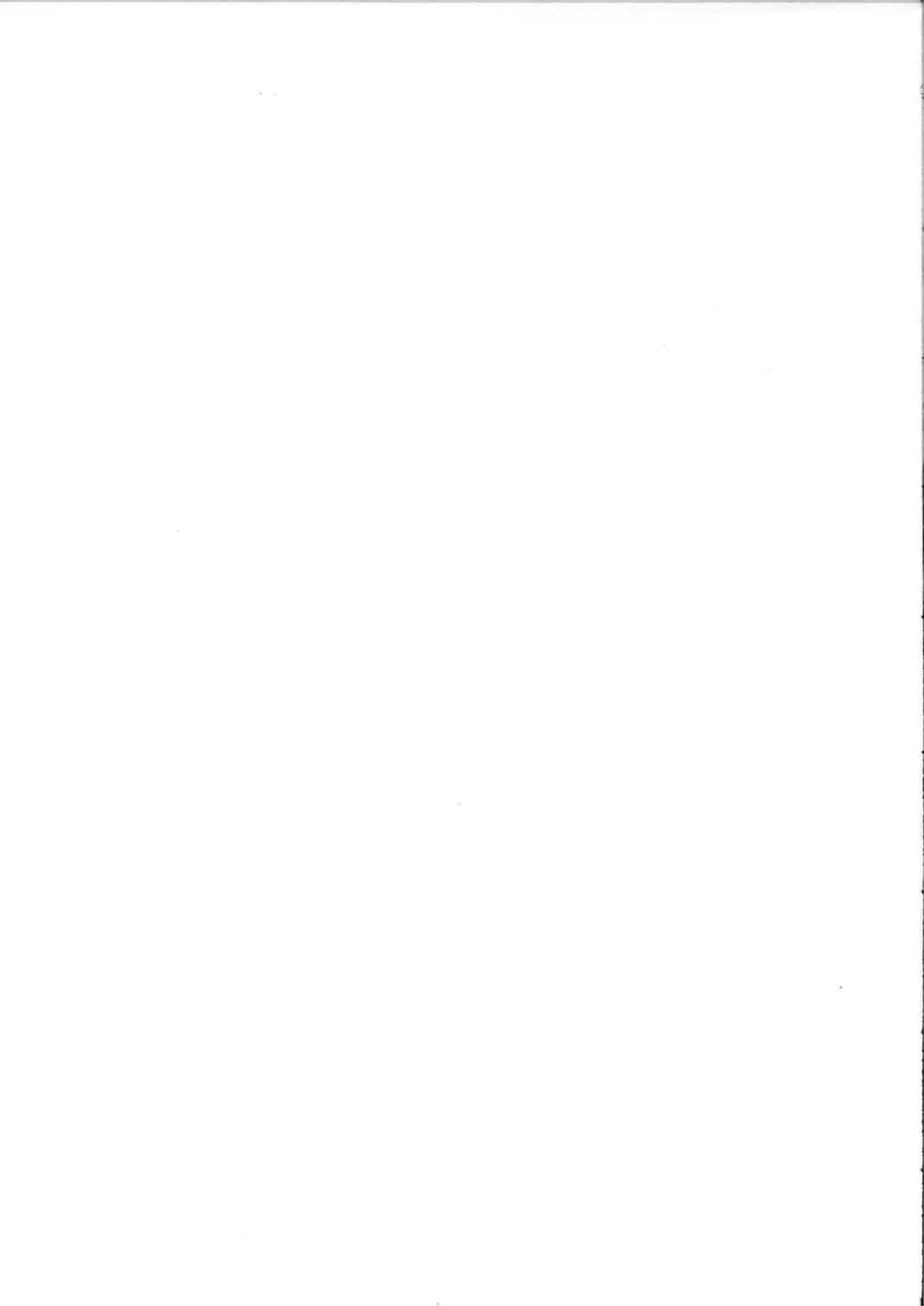




# 松浦市内遺跡確認調査(1)



松浦市教育委員会



## 発刊にあたって

松浦市は、日本列島の西端に位置し、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理的条件から、旧石器時代から中世期にかけての文化財が数多く存在しております。

本市は、人と未来を創造するみどりあふれる国際港湾都市づくりを目指し、自然環境の保護を念頭において各種の地域開発を進めております。近年、本市においても各地で各種の開発事業が相継いで行われるにあたり、埋蔵文化財の保存が問題となっております。そこで教育委員会では、市内に保存された数多くの文化遺産の保護を行うとともに、その活用に努力しております。

今回の報告書は、平成4年度に実施した寺ノ尾C遺跡と姫神社遺跡の確認調査の概要をまとめたものであります。決して満足のできるものではございませんが、学術研究に少しでも寄与でき、市民の皆様が文化財に対する理解と認識、さらに文化財保護の一助になれば幸いと存じます。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と、多くの方々のご参加を得て実施することができました。特に調査にあたって快くご協力いただきました土地所有者の方々に対しまして心より感謝し、本書が文化財に対する認識の広まりと文化財保護に役立つことを祈念いたしまして発刊のご挨拶といたします。

平成6年2月

松浦市教育委員会

教育長 黒川 壽 信

## 例 言

1. 本書は、平成4年度に実施した松浦市内遺跡の確認調査報告書である。
2. 調査は、長崎県文化課の指導をうけて、松浦市教育委員会があたった。
3. 調査は、松浦市教育員会社会教育課が実施し、社会教育主事の中田敦之があたった。
4. 本書の執筆・編集は中田があたった。
5. 遺構・遺物の写真撮影及び実測は中田があたった。
6. 本書の作成にあたっては、県文化課にご協力を賜った。
7. 調査によって出土した遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたっている。
8. 本書は、松浦市文化財調査報告書第11集にあたる。

## 本 文 目 次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査関係者	1
II 地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	3
III 寺ノ尾C遺跡の調査	8
1. 調査経過	8
2. 土層および出土遺物	9
3. 表面採集遺物	14
IV 姫神社遺跡の調査	17
1. 調査経過	17
2. 土層および出土遺物	19
3. 表面採集遺物	24
V まとめ	25

## 挿 図 目 次

- 第1図 松浦市地質図
- 第2図 松浦市内西部地区遺跡分布図 (1/25,000)
- 第3図 寺ノ尾C遺跡周辺図 (1/5,000)
- 第4図 寺ノ尾C遺跡 (第4地点) 字図
- 第5図 寺ノ尾C遺跡調査区設定図 (1/1,500)
- 第6図 寺ノ尾C遺跡土層図 (1/40)
- 第7図 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (2/3)
- 第8図 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/3)
- 第9図 寺ノ尾C遺跡表面採集遺物 (2/3)
- 第10図 寺ノ尾C遺跡第3地点表面採集遺物 (1/3)
- 第11図 姫神社遺跡周辺図 (1/5,000)
- 第12図 姫神社遺跡周辺字図
- 第13図 姫神社遺跡調査区設定図 (1/750)
- 第14図 姫神社遺跡土層図及び遺物出土状況 (1/40)
- 第15図 姫神社遺跡出土遺物 (2/3)
- 第16図 姫神社遺跡出土遺物 (1/3)
- 第17図 姫神社遺跡表面採集遺物 (2/3)

## 表 目 次

表1 松浦市西部地区遺跡分布一覧表

## 図 版 目 次

- |       |                  |               |
|-------|------------------|---------------|
| PL. 1 | 寺ノ尾C遺跡遠景 (南より)   | 寺ノ尾C遺跡調査風景    |
| PL. 2 | 寺ノ尾C遺跡T5土層状況     | 寺ノ尾C遺跡T9土層状況  |
| PL. 3 | 寺ノ尾C遺跡T10土層状況    | 寺ノ尾C遺跡T17土層状況 |
| PL. 4 | 寺ノ尾C遺跡T22土層状況    | 寺ノ尾C遺跡T23土層状況 |
| PL. 5 | 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/1) |               |
| PL. 6 | 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/1) |               |

- PL. 7 寺ノ尾C遺跡表面採集遺物 (1/1)
- PL. 8 寺ノ尾C遺跡第3地点表面採集遺物 (1/2)
- PL. 9 姫神社遺跡遠景 (南西より) 姫神社遺跡調査風景
- PL. 10 姫神社遺跡T2土層状況 姫神社遺跡T7土層状況
- PL. 11 姫神社遺跡T8土層状況 姫神社遺跡T10土層状況
- PL. 12 姫神社遺跡跡出土遺物 (1/1)
- PL. 13 姫神社遺跡跡出土遺物 (1/2)
- PL. 14 姫神社遺跡表面採集遺物 (1/1)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

松浦市における埋蔵文化財保護行政は、この数年、農業基盤整備事業（圃場整備）や道路改良工事等の公共事業をはじめ、個人宅地等の民間事業も増加しています。そこで、以上のような各種開発事業の急増に伴い立会い調査・確認調査の発掘調査件数も比例して増加の傾向を示しています。

こんな中で松浦市では、平成3年内陸型工業団地を計画し、同年9月、工業団地造成に伴う協議を関係各課にて行っている。その中で候補地として寺ノ尾地区・白浜地区・今福田原地区の3ヶ所が計画されており、その内2ヶ所に埋蔵文化財包蔵地として寺ノ尾C遺跡と中ノ瀬遺跡が周知されていた。その後、造成計画は寺ノ尾地区にて行われることが決定したため寺ノ尾C遺跡について市商工観光課と市教育委員会とで協議を行った。協議の中で現時点では遺跡の範囲等については不明であるため、また、協議に必要な資料を得ることを目的に平成4年度に確認調査を行うことになり、調査費は平成4年の当初予算に計上した。

姫神社遺跡に関しては、平成4年8月15日付にて東京都練馬区在住の北川巻生氏より農地法第5条の規定による許可申請が提出された。計画地(2913㎡)は姫神社遺跡の範囲に含まれているため申請者と協議を重ね、平成4年8月28日付にて同氏より文化財保護法第57条の2第1項の規定による届出が市教育委員会へ提出された。これにもとずき関係者と再度協議を重ねた結果、確認調査を実施することに決定し、その調査費については9月の補正予算に計上した。

## 2. 調査関係者 (敬称略)

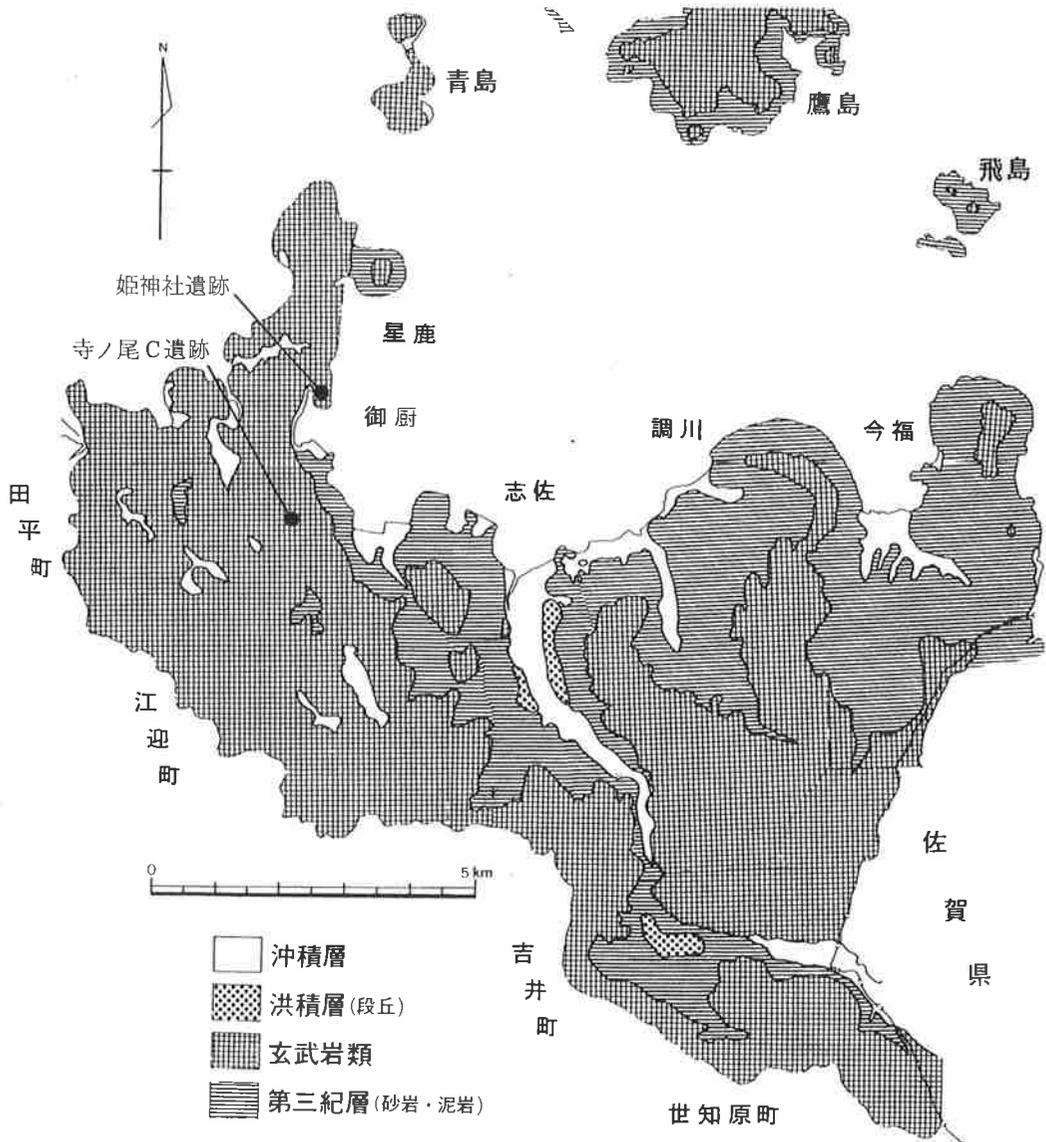
調査主体	松浦市教育委員会
調査総括	松浦市教育長 黒川 壽 信
事務局	松浦市教育委員会社会教育課
調査担当	社会教育主事 中 田 敦 之
調査協力	松浦市建設課、松浦市商工観光課 寺ノ尾C遺跡……守山忠、大川内勝己、大川内秀男、福田金吉、福田勝清、氏山肇、氏山等 姫神社遺跡……北川巻生、小倉爲吉、北川益生
作業員	久原サダエ、岡村康代、福田ミヨ子、辻礼子、里森知恵子、冨野トシエ、前田重子、田中ミツノ、岡村ヒサノ、村田政子、山口サエ、松永セツエ、天久保正子
遺物整理	江口鈴子、市場草深子、林真佐子、成富成美

## II 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。北には伊万里湾・玄界灘、西から南にかけては北松浦郡の田平・江迎・吉井・世知原町と、東は佐賀県伊万里市と接している。市の面積は95.59km<sup>2</sup>で、人口は24,125人である。

市内の地質は第三紀層を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造をなして



第1図 松浦市地質図

いる。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われる。したがって、佐賀県境を占拠する標高777mの国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。松浦市の地勢は、南高北低をなし、河川もすべて北流している。市の南側には400～500m級の高位台地があり、悪太郎川以西では100m以下の低位台地が広がっている。市西部の星鹿半島の先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。

今回調査を行った市西部は、玄武岩が不整合に覆っていた所に玄武岩台地を形成している。この台地は・竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を發し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられずラップ状に開いた三角江となっている。

## 2. 歴史的環境

寺ノ尾C遺跡は松浦市役所より西方約4kmの御厨町上登木免字美濃田、横久保免天久保ほかに位置している。市道横久保・白岳線と周辺の台地上にあり、表面採集により4ヶ所の散布地が認められている。

姫神社遺跡は松浦市役所より北西約4.5kmの星鹿町北久保免字宮崎に位置している。

松浦市内の遺跡としては、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多い。特に両遺跡の周辺は市内でも特に遺跡の多い地域として注目されている<sup>注1</sup>。そんな中で松浦市の西部一帯では、かなりの昔から、しかも連綿として絶えることのない人々の遺跡が残っている。現在までのところ、旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田B・C・D、中ノ崎・長蔵坊・田口高野遺跡などで確認されている。さらに、平成2年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う寺ノ尾C遺跡の確認調査ではナイフ形石器・台形石器の良好な包含層が検出されている<sup>注2</sup>。星鹿半島一帯は、道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地であり、遺跡はこのほか多く発見されている。しかし、発掘調査では良好な包含層の確認までには至っていない。

次の縄文時代では、姫神社遺跡・小嶋遺跡など良好な遺跡も知られている。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤、吉崎昌一ら）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている<sup>注3</sup>。この論文については福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって訳されている<sup>注4</sup>。同論文では縄文前期の轟式土器、曾畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などがある。また、萩原博文・久原巻二氏による縄文後期の土器片と共に石鋸・サイドブレードが採集されている<sup>注5</sup>。小嶋遺跡は、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曾畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では

石鏃・剥片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などがある。本報告は未刊である。<sup>注6</sup>その他では、平成2年度の竜尾川地区<sup>注7</sup>県営圃場整備事業に伴い田川遺跡の確認調査では縄文中期の阿高式土器・剥片鏃が出土している。

弥生時代では、北久保B遺跡と姫神社遺跡で後期の壺・甕類が採集されている。さらに大正14年に発見され、<sup>注9</sup>現在は長崎県の重要遺跡になっている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて4次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壇等の遺構と<sup>注10</sup>西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪等の遺物が出土している。その他では平成2年の竜尾川地区<sup>注11</sup>県営圃場整備事業に伴う田原遺跡の調査で弥生後期を中心とする良好な包含層が検出されている。寺ノ尾C遺跡（第3地点）で弥生中期を中心とする土器片が出土しており、今後は遺跡数も増加すると思われる。

古墳時代については、従来よく知られていなかったが、昭和62年に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。3基を確認し、そのうちの1号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、7世紀後半代に比定できる。<sup>注12</sup>また、詳細は不明であるが、貴船神社古墳から提瓶1個と土師器が出土している。<sup>注13</sup>

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢納する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現われるのは『東南院文書』で、寛治3年（1089）8月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の、康和4年（1101）8月29日の肥前国宇野御厨檢校源久讓状案である。この文書は偽文書の疑いがある。「宇野御厨野檢校散位」（源久）という松浦党の祖といわれる人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後松浦党の諸氏は祖として仰いでいる。松浦党は宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源性一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われる。『河上神社文書』の正応5年（1292）の「肥前国河上宮造宮用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、これらの資料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域の一帯・南松浦郡の地域からと伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現われているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期には、「御厨熊徳」なる人物名が見え、引安4年（1281）に宇野御厨の預所から無主の荒野一町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は、「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎

連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、御厨城を居城としていた。

南北朝期に入ると、松浦党はしばしば一揆を結んで、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳4年(1384)の下松浦一族一揆契諾状には「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。

室町期に入ると、御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗8年(1408)6月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの名が見える。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」の名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貞純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳3年(1491)に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐる激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。その後の御厨は平戸領となる。

注1 下川達彌 「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」 『長崎県北松浦地方の文化』 長崎県立美術館 1984

注2 中田敦之 『田原積石塚・寺ノ尾C遺跡』 松浦市文化財調査報告書第7集 松浦市教育委員会 1990

注3 ALBERT MOHR and MASAKAZU YOSHIZAKI 「Cultural Sequence in Western Kyushu」  
『Asian Perspectives』 XVI (2) 1973

注4 水ノ江和同 「西九州における文化の変遷」 『古文化談叢』22 1990

注5 萩原博文・久原卷二 「九州西北部の石鏃、サイドブレイドについて」 『古代文化27-4』 1975

注6 中田敦之 『小嶋古墳群』 松浦市文化財調査報告書第4集 松浦市教育委員会 1988

注7 中田敦之 『田川遺跡』 松浦市文化財調査報告書第9集 松浦市教育委員会 1991

注8 樋口隆康・釣田正哉 「平戸の先史文化」 『平戸学術調査報告書』 1951

注9 前田 毅 「肥前御厨貝塚発見報告」 『人類学雑誌40-10』 1925

注10 中田敦之 『池田遺跡』 松浦市文化財調査報告書第6集 松浦市教育委員会 1990

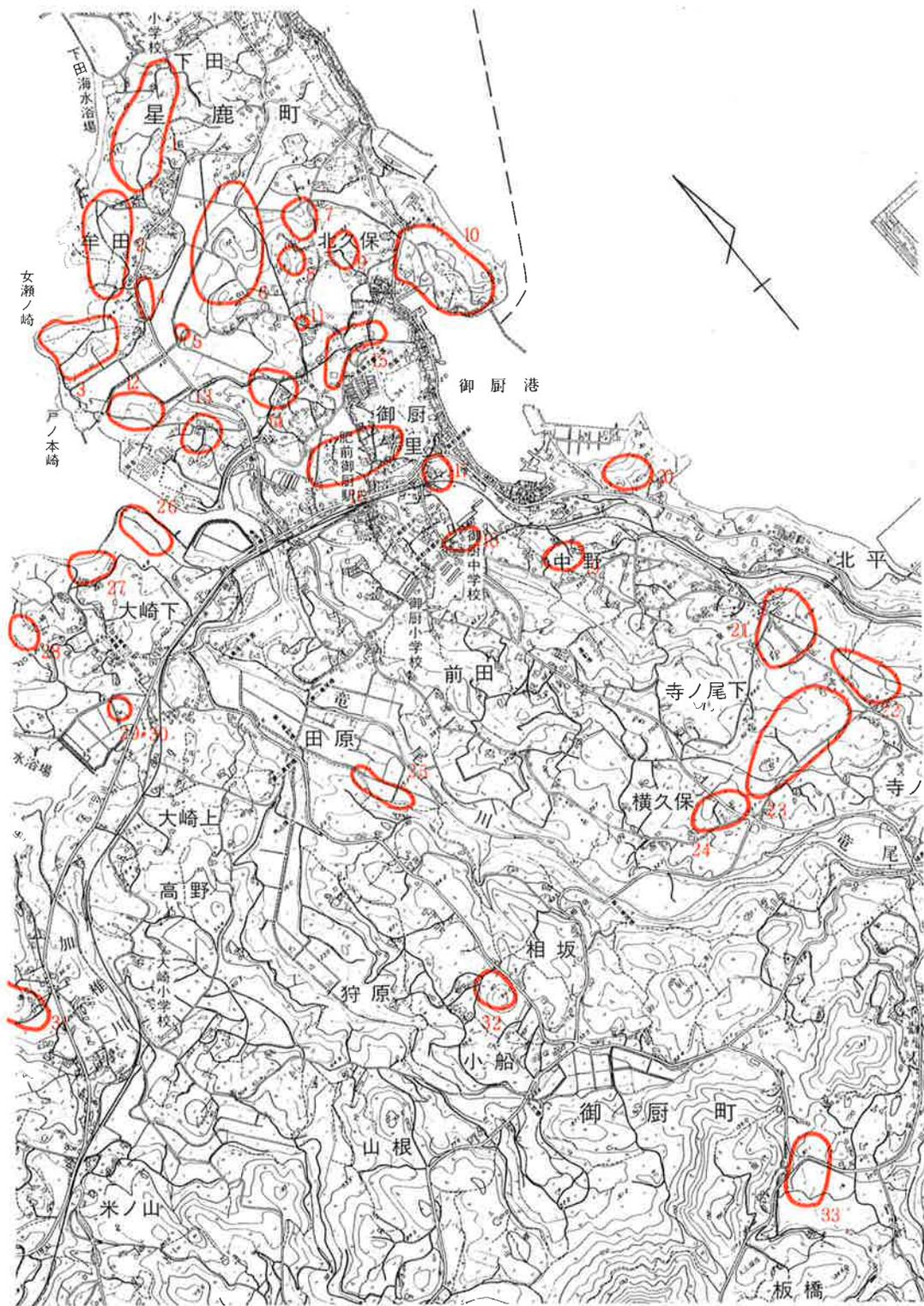
注11 中田敦之 『田原遺跡』 松浦市文化財調査報告書第10集 松浦市教育委員会 1991

注12 注6文献

注13 注9文献

#### 参考文献

1. 角川日本地名辞典編纂委員会 『角川日本地名辞典』-42長崎県- 角川書店 1987
2. 長崎県史編纂委員会 『長崎県史』-古代中世編- 1980
3. 外山幹夫 『松浦氏と平戸貿易』 国書刊行会 1987
4. 外山幹夫 『松浦党のすがた』 松浦市 1990



第2図 松浦市西部地区遺跡分布図 (1/25,000)

表1. 松浦市西部地区遺跡分布一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	遺跡地 図番号	備考
1	牟田 B	星鹿町牟田免細	ナイフ形石器、細石核、細石刃、石鏃	52-27	
2	牟田 A	〃 牟田免中尾	ナイフ形石器、黒曜石原石	52-26	
3	佐世保崎	〃 牟田免佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、黒曜石原石、石鏃	52-24	昭和57年調査
4	牟田池上	〃 牟田免池上	石核、石鏃、黒曜石原石	52-25	昭和58年調査
5	北久保経塚	〃 北久保免竿	弥生土器、剥片		2 基
6	牟田 C	〃 北久保免藤園	ナイフ形石器、台形石器、搔器、石鏃	52-36	
7	北久保 A	〃 北久保免勢ノ巣	石鏃、弥生土器	52-38	
8	北久保 B	〃 北久保免浦頭	剥片	52-37	
9	北久保 C	〃 北久保免浦頭	石鏃、剥片	52-39	
10	姫神社	〃 北久保免宮崎	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸	52-40	昭和41年 平成4年 調査
11	貴船神社古墳	〃 北久保免浦頭	須恵器、土師器		
12	戸ノ本崎	〃 牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃		
13	中ノ崎	御厨町池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	52-23	
14	長蔵坊	〃 池田免長蔵坊	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	52-42	
15	池田	〃 池田免田崎 里免下長峯	縄文土器、弥生土器、石斧、石鏃、白磁、青磁、獣骨	52-41	昭和63年 平成元年 調査
16	坂本	〃 里免長峯	石鏃、黒曜石原石	52-43	
17	御厨城跡	〃 里免大久馬川			
18	御厨館跡	〃 里免館			
19	中野	〃 中野免中野	ナイフ形石器		
20	向山館跡	〃 里免坊ノ上			
21	寺ノ尾 A	〃 上登木免美濃田	ナイフ形石器、台形石器、細石核、石鏃	52-48	
22	寺ノ尾 B	〃 上登木免中田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃	52-49	
23	寺ノ尾 C	〃 上登木免美濃田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃	52-47	平成元・4年調査
24	横久保	〃 横久保免大久保	剥片、弥生土器	52-46	
25	田原	〃 田原免田原	弥生土器、須恵器、石鏃		平成2年調査
26	水尻 A	〃 大崎免水尻	黒曜石原石	52-22	
27	水尻 B	〃 大崎免水尻	ナイフ形石器、石斧、スクレイパー	52-21	
28	蕨川	〃 大崎免俵場	黒曜石原石	52-20	
29	小嶋古墳群	〃 大崎免小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃	52-19	昭和62年調査
30	小嶋	〃 大崎免小嶋	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸		昭和61年調査
31	田口高野	〃 西田免田口高野 西木場免寺山	ナイフ形石器、石鏃、剥片	52-16	
32	城ノ越城跡	〃 小船免栗山			
33	田川	〃 田代免前田	台形石器、縄文土器、石鏃、剥片	52-45	平成2年調査

### Ⅲ 寺ノ尾C遺跡の調査

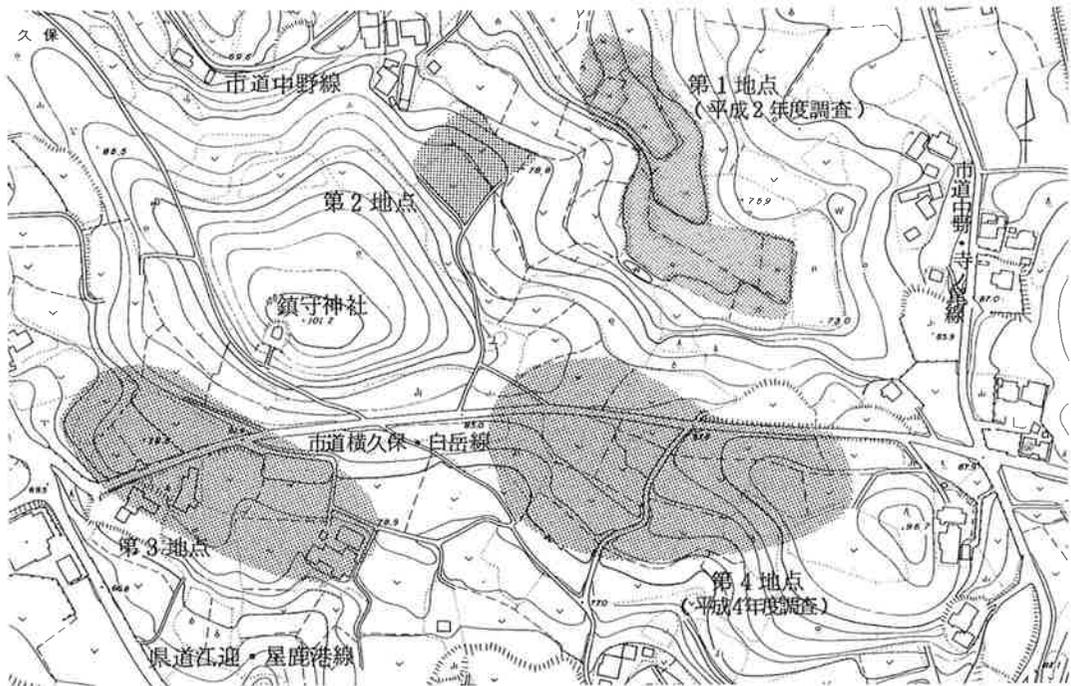
#### 1. 調査経過

寺ノ尾C遺跡の範囲確認調査は、平成4年4月20日～6月5日までのべ47日間で終了することができた。

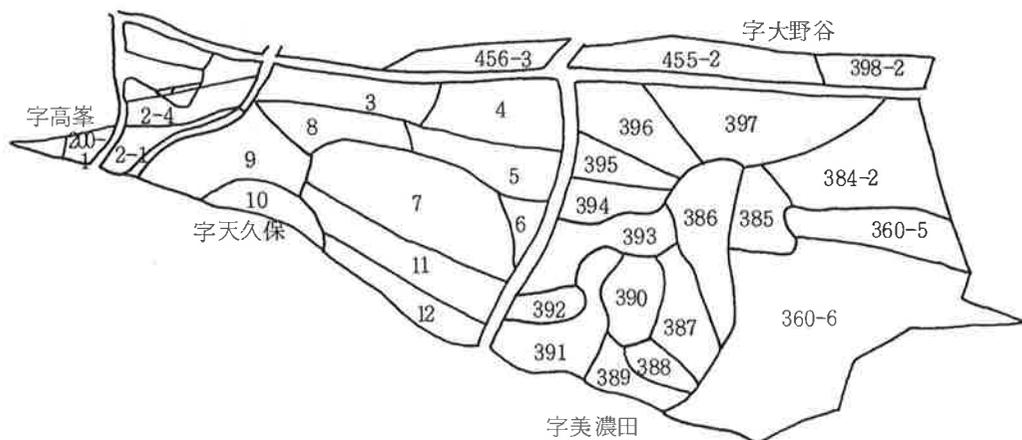
寺ノ尾C遺跡は、昭和62年刊行の『長崎県遺跡地図』から収録されているが、それ以前は収録されていなかった。遺跡の中心は範囲内を横断する市道横久保・白岳線の道路両側の畑で、松浦高校郷土社会部によって採集された遺物にはナイフ形石器・台形石器・石槍・石鏃・搔器・細石核・弥生土器があった。<sup>注1</sup>平成2年度には竜尾川地区県営圃場整備事業に伴って市道の北側の水田地帯で確認調査が行われ、ナイフ形石器を主体とする石器群が検出されている。<sup>注2</sup>

今回の調査を行った地点は範囲の中でも最も遺跡の中心となる地点で、市道の南側の標高約88mから約78mの北側から南側に傾斜している畑である。遺跡内の字には御厨町上登木免字美濃田・大野谷、横久保免天久保・高峯がある。

調査は工事予定地区の26,400㎡を測量基本線にそって20m×20mのメッシュに設定して行った。調査区は畑として利用されており、白菜・大根・盆栽用のつつじが植えてあり、それらをぬって調査区に5m×2mのトレンチ11ヶ所、3m×2mのトレンチ2ヶ所、2m×2mのトレンチ11ヶ所の計24ヶ所を設定し、合計166㎡を調査した。調査区の名称は設定した順にT1～T24を付して呼ぶ。その結果、24ヶ所の調査区から443点の遺物が出土しているが良好な遺



第3図 寺ノ尾C遺跡周辺図 (1/5,000)



第4図 寺ノ尾C遺跡(第4地点)字図

物包含層は検出されなかった。周辺からの採集遺物を含めても939点であった。

今回の調査地点の西側の丘陵(第3地点)でも、弥生土器等が採集されたため、地域周辺には遺跡が広範囲に分布している可能性が出てきた。しかし、遺跡の性格上同じなのかあるいは横久保遺跡の範囲に入るのか今後の調査に譲りたい。

注1 久原巻二 「寺ノ尾遺跡について」 『松浦考古3号』 長崎県立松浦高等学校郷土社会部 1966

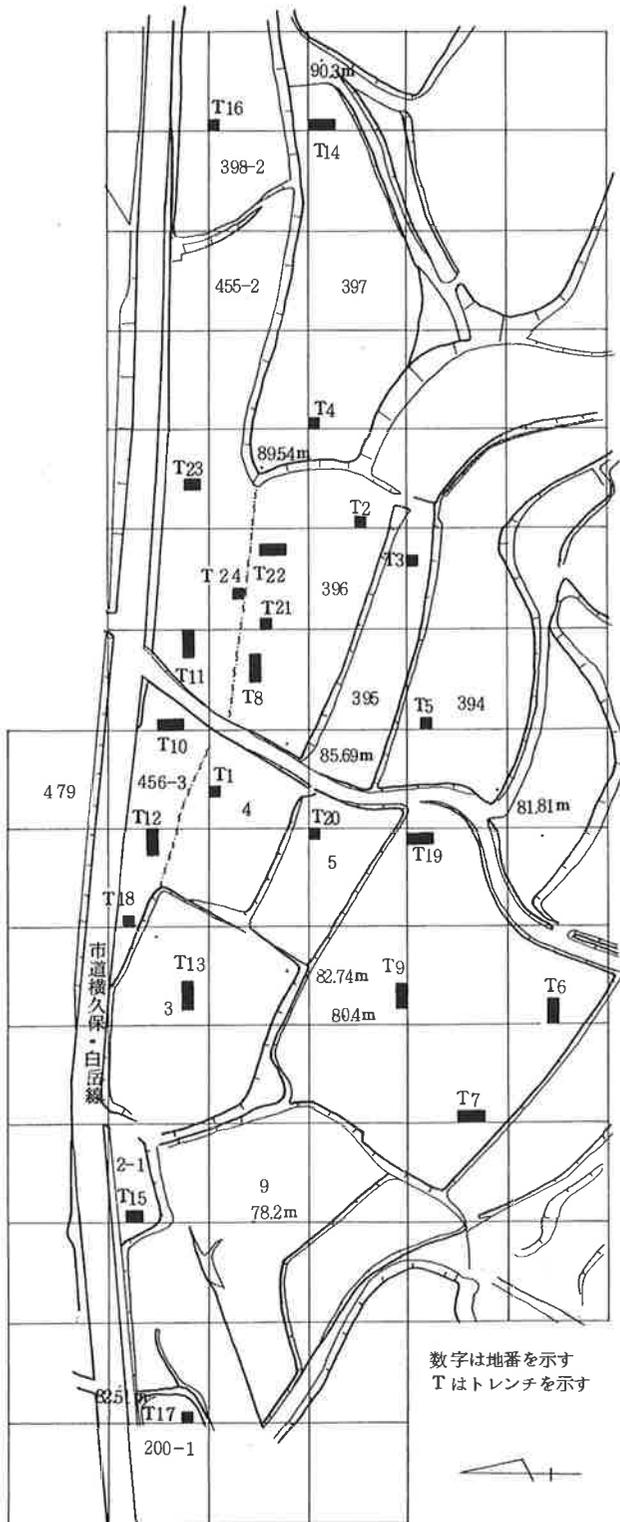
注2 中田敦之 『田原積石塚・寺ノ尾C遺跡』 松浦市文化財調査報告書第7集 松浦市教育委員会 1990

## 2. 土層及び出土遺物(第6図~第8図)

### 土層

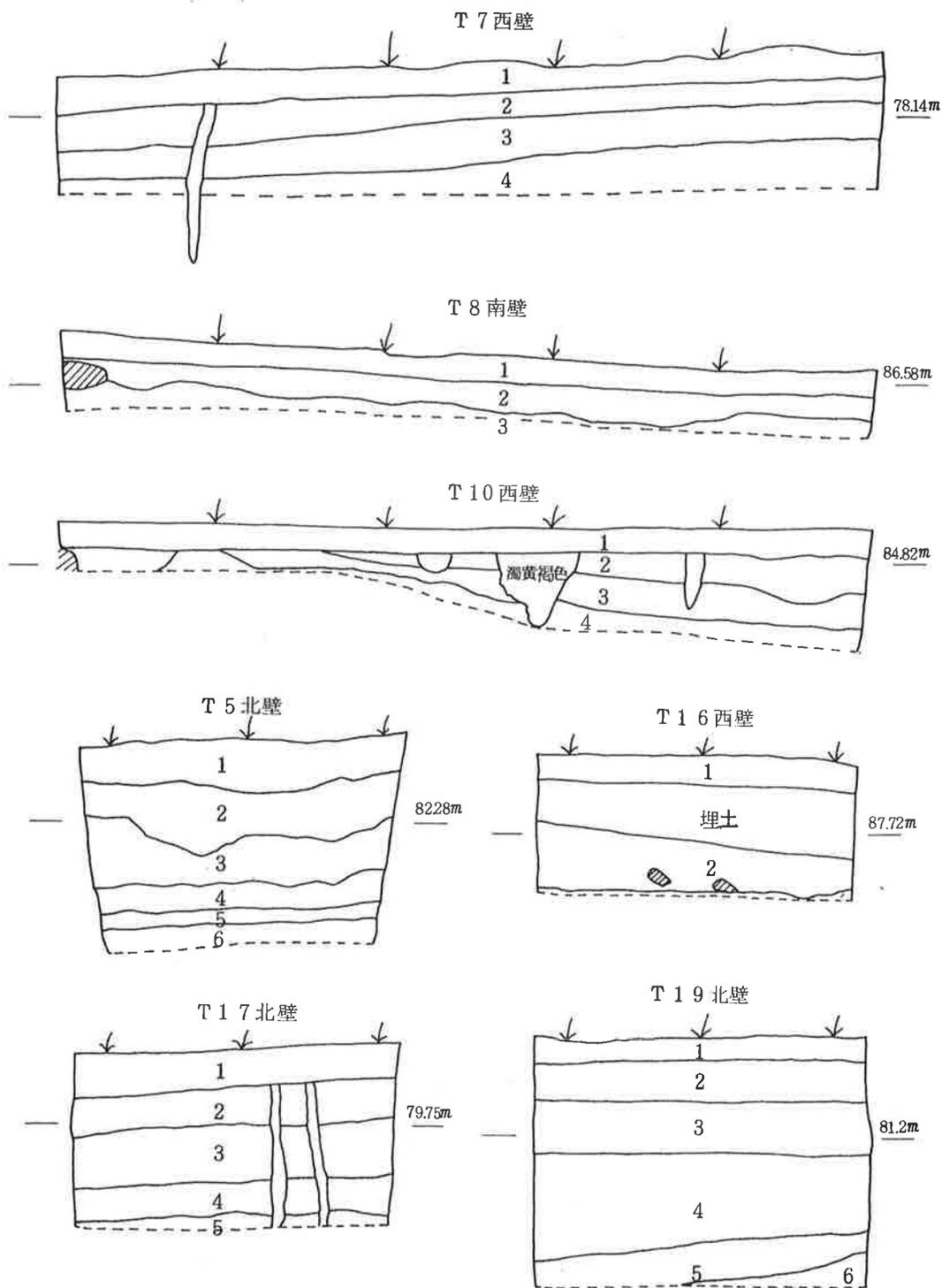
調査区は、工事予定地区の特に掘削工事が行われる市道横久保・白岳線付近の畑を中心に設定した。遺跡は段々の棚田状の畑地に広がっており、最も西側のT14から最も南側に設定したT6との標高差は約10m程ある。よって、土層の堆積状況にも相違が認められた。

T1・T2・T13・T20の調査区は表土の下にはすぐ地山が現われ、包含層は検出されなかった。T5・T9・T19の調査区のラインでは地山までの確認ができなかった。Ⅱ層は褐色粘質土層、Ⅲ層が褐黄色粘質土層、Ⅳ層が褐色粘質土層、Ⅴ層が赤褐色粘質土層で若干の玄武岩風化礫を含んでいる。Ⅵ層も赤褐色粘質土層で玄武岩風化礫を含んでいる。T6・T7の調査区は遺跡の中でも最も南側に設定した所で表土の下に褐色粘質土層のⅡ層が堆積しており、この



第5図 寺ノ尾C遺跡調査区設定図 (1/1,500)

層より胎土に滑石を混入した縄文土器1点もあった。Ⅲ層は褐黄色粘質土層である。396番地では苗木のツツジがあり思うように調査区を設定できなかったが、234点と表採資料が特に多く採集された地点であったため3ヶ所のT8・T21・T22を設定した。表土の下には褐黄色粘質土層が約20cmの厚さで地山の褐色混礫層の上に堆積していた。本来はこの周辺が遺跡の中心地をなす所であったと思われる。T10・T12・T18を設定した456-3番地は表土の下に埋土がありその下に旧畑地があり造成した痕跡が認められた。しかし、T10では南側がすぐ地山が確認でき、北側に向かって若干傾斜している状況が認められた。この状況で北側の畑地に続いていると思われる。Ⅱ層は褐黄色粘質土層、Ⅲ層は褐黄色粘質土層で、Ⅱ層より赤味を増している。Ⅳ層は赤褐色粘質土層である。最も東側のT16の調査区では表土の下に厚さ20~30cmの埋土があり、Ⅱ層は褐色粘質土層、Ⅲ層は暗褐色粘質土層で遺物も表土から3



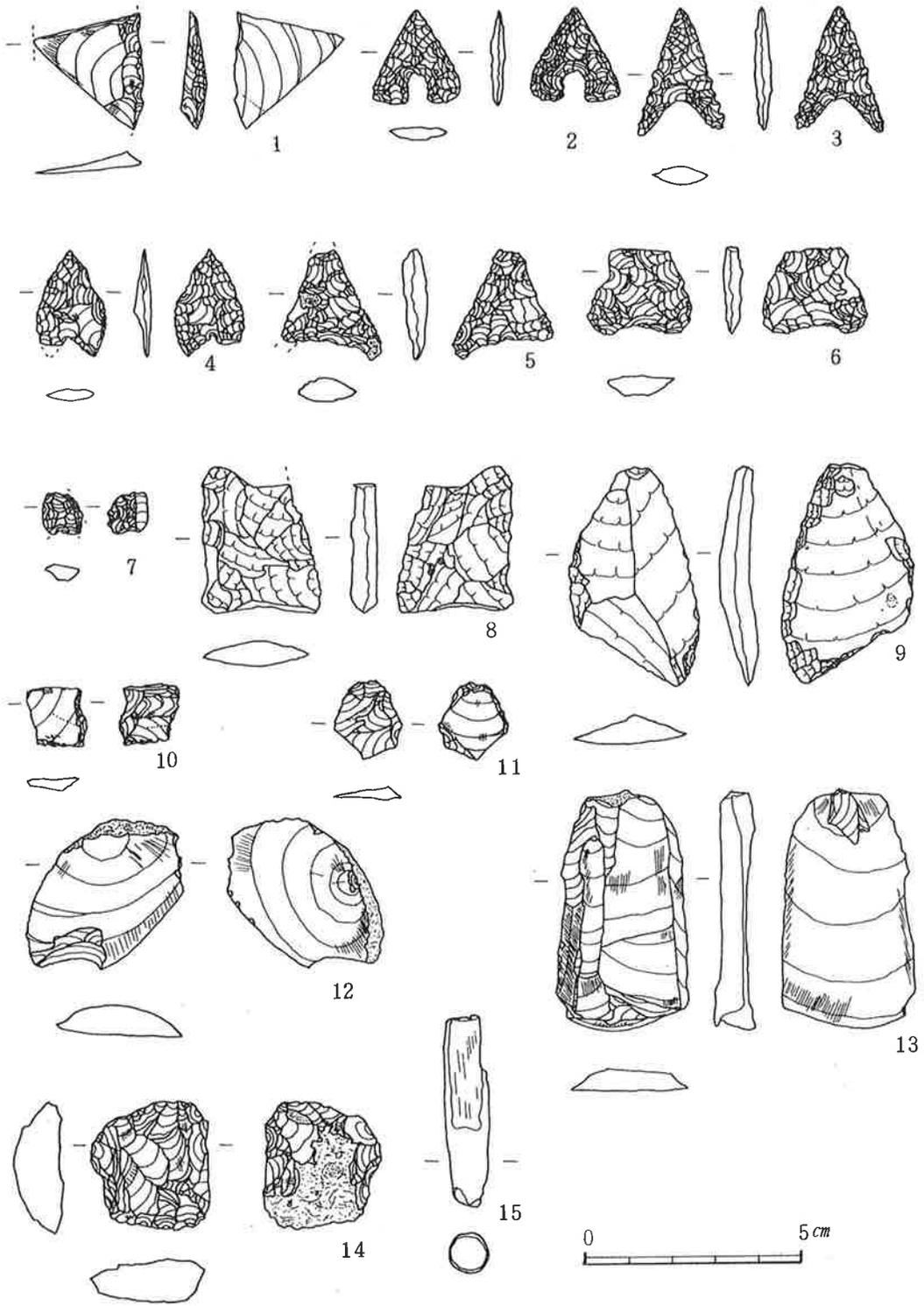
第6図 寺ノ尾C遺跡土層図 (1/40)

点出土している。遺跡の最西側にはT17の調査区を設定した。表土の下にはⅡ層褐色粘質土層、Ⅲ層は明褐色粘質土層に別れていた。Ⅳ層は褐黄色粘質土層で、Ⅱ層より黄味を帯びていた。Ⅴ層は赤味を帯びた褐色粘質土層であった。遺物はⅡ層より4点出土している。特にT11・T23・T24がある455-2番地では地山まで近代の掘削が行われており暗渠排水のための溝跡が一面に確認できた。T4を設定した397番地は表土の下には厚い埋土層が認められ、包含層の検出には至らなかった。遺物は表土及び埋土から若干出土している。T15は市道のすぐそばに設定した。表土の下は北側から南側へ傾斜しており、Ⅱ層の茶褐色粘質土層の中に弥生土器が検出されている。この調査区は後の設計段階で工事予定地区外となっている。

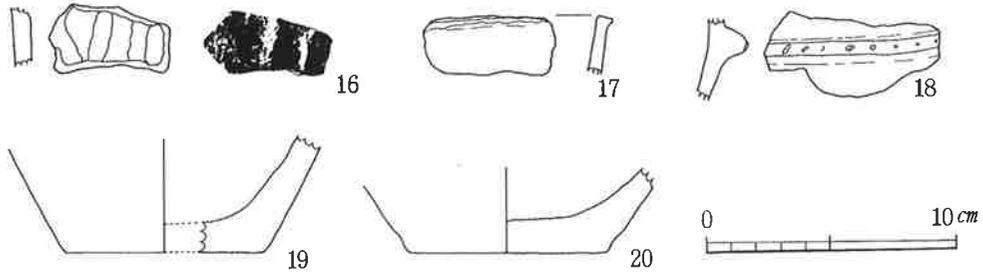
### 出土遺物（第7図・第8図）

今回の寺ノ尾C遺跡の調査で出土した遺物は合計443点であった。そのうち実測可能な20点を図示した。遺物は大半が表土層及び埋土からの出土で、本来の包含層からの出土は少なかった。それぞれの調査区からまとまったの出土状況ではなく散布の状況であった。中ではT11の埋土層から黒曜石製石鏃・剥片・碎片など82点と多かった。T21Ⅱ層からは黒曜石製石鏃・石核・碎片など29点が出土している。T22の落ち込みからは黒曜石製剥片・碎片、安山岩製剥片とともに無文の胎土が粗い縄文土器10点が出土しているが細片のため時期等の決定には至らなかった。T15Ⅱ層からは41点の弥生土器が出土している。

1は黒曜石製で全面パティナが著しい比較的薄手の縦長剥片の側縁に入念なブランティング加工を行っているナイフ形石器の類に入るとされる。T7Ⅱ層より出土。2～8は縄文期の石器の石鏃である。材質は2・3・5・7が黒曜石製で、4・6が灰青色黒曜石製、8が安山岩製である。2は押型文土器に共伴する典型的な鋏形鏃で両面に丁寧な調整を施している。先端部から直線的で両側縁な基部で内湾し丸みをもつ。挟りは深く大きい。先端角度は60°重量は0.95gで、T11埋土よりの出土である。3は両側縁にわずかに鋸歯状の凹凸が見られ銛先的な機能を有する挟りがやや深い石鏃である。先端角度は45°重量は1.25gで、T15Ⅱ層よりの出土である。4は五角形状を呈し基部に浅い挟りが多少認められるもので先端部と脚部の一部を欠損している。先端角度は64°重量は0.85gで、T21Ⅱ層出土である。5・6も基部にわずかに挟りが認められるものである。5は重量2.50g、先端角度は46°でT18表土の出土である。6は重量2.20gで、T3表土よりの出土である。7は器形先端部と両脚部を欠損しており、重量は0.43gで、T2表土よりの出土である。8は粗雑な二次加工が施されている。重量は7.15gで、T12埋土よりの出土である。9は安山岩製の縦長剥片を利用したスクレイパーである。側縁には加工痕が認められる。重量は0.43gで、T22落ち込み内出土である。10・11は黒曜石製の使用痕のある剥片である。どちらもT10Ⅲ層出土である。12は横広の黒曜石製剥片である。T9Ⅱ層出土。13は黒曜石製の縦長剥片である。重量は12.35gで、T18表土出土である。14は裏面に一部自然面を有する黒曜石製石核である。T21Ⅱ層出土である。15は銅製の煙管で雁首



第7图 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (2/3)



第8図 寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/3)

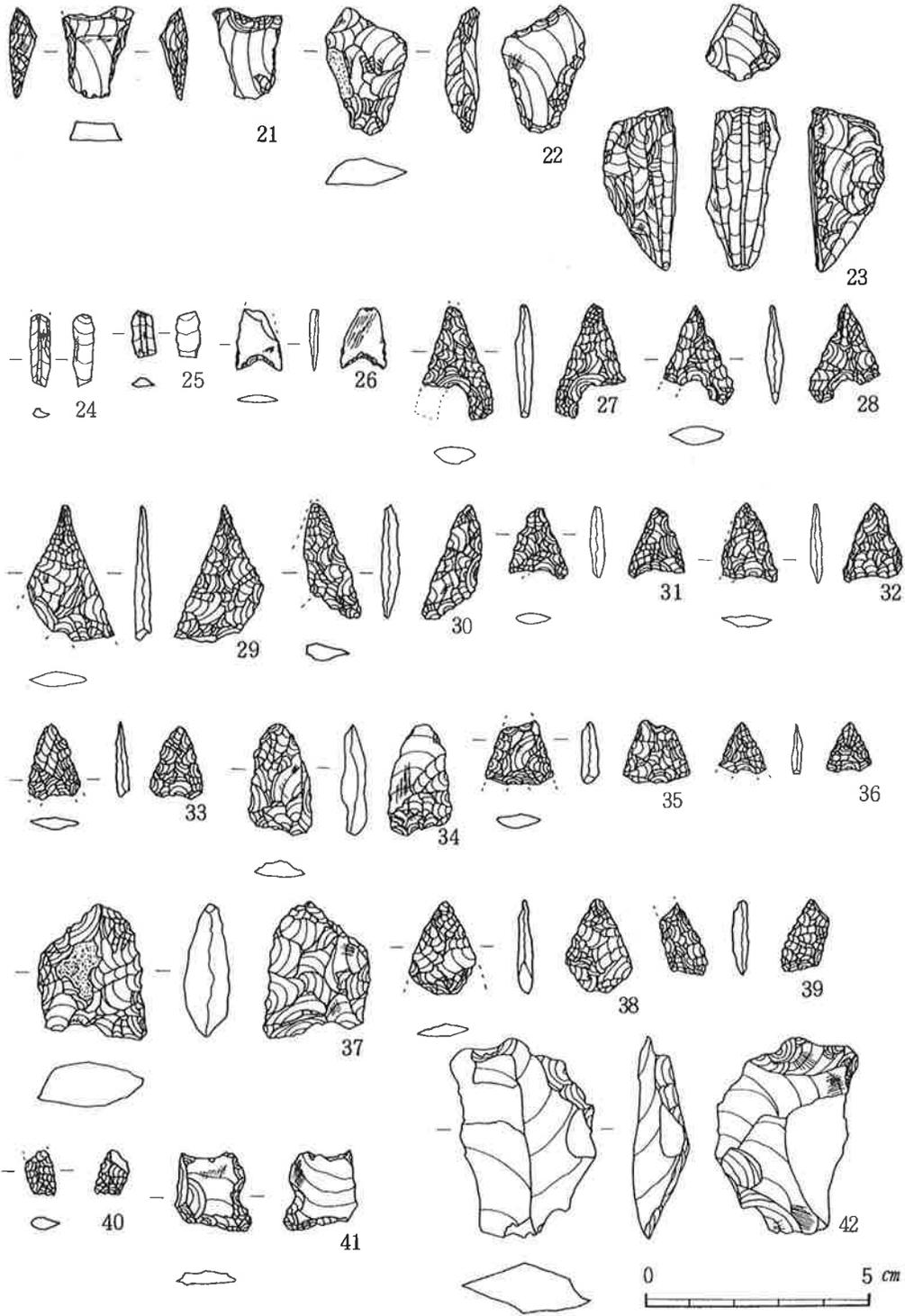
の火皿を欠損している。煙管の中には竹を加工した木片を通してある。T23埋土の出土である。

16～20は土器である。16は縄文中期の阿高式系土器の底部立上りの部分である。縦に棒状の施文具による凹線を施している。胎土に滑石粉末を混入している。T12表土出土である。17～20は弥生土器でいずれもT15Ⅱ層からの出土である。17は口縁部片で、若干外面につまみ出したような形状を呈している。18は胴部に一条の隆帯が巡り刻目を施している。19・20は平底の底部片で若干ハケ目調整痕が認められる。いずれも弥生中期後半の資料である。

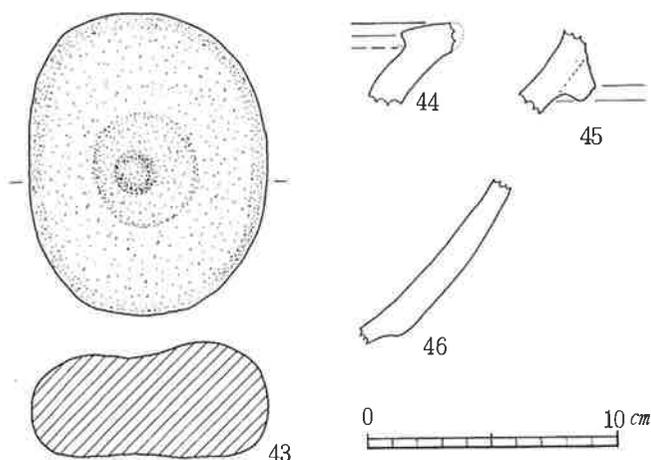
### 3. 表面採集遺物 (第9図・第10図)

今回の調査で表面採集した遺物は合計445点である。その中でもT18の調査区を設定した396番地からは最も多い234点の遺物が採集されている。次は市道を挟んで466-3番地の北側の畑で56点であった。455-2番地は30点、456-3番地は21点であった。第2地点からは7点が採集されている。このうち実測可能な26点を図示した。すべて黒曜石製である。

21は横長剥片を利用した小型の台形石器で、刃部と基部が平行し、刃部に最大幅をもつ。ブラントニング加工は主要剥離面側より両側縁共に急角度に施している百花台型タイプである。最大長2.05cm、最大幅1.55cm、重量1.50g、479番地表採。22はバルブ部が厚い横長剥片を利用している。部分的に平坦加工を施し側縁部を形成している。長軸に対して斜交する刃部をもち、その刃部に最大幅を有する台形石器である。刃部の一部を欠損しており、表面には一部自然面を有する。最大長2.05cm、最大幅1.55cm、重量1.50g、479番地表採。この2点は時間的経緯の中で分けられるようだ。23は小円礫を素材として利用し、背面より調整剥離を行い両側縁部を作りだしている。打面は平坦で剥片剥離の打角は直角に近い。細石刃剥離面より打面調整を行い槌状剥離痕が6条残っている半舟底形細石核である。最大長3.65cm、最大幅1.7cm、槌状剥離の長さ3.5cm、最大幅0.4cmである。重量9.0g、397番地表採。24・25は細石刃である。24は現長1.6cm、幅0.45cmで頭部と先端部を欠損している。重量0.12g、396番地表採。25は中間部を欠損した頭部のみの資料である。現長1.0cm、幅0.5cmで、重量0.1g、455-2番地表採。26～40は石鏃である。26は局部磨製石鏃で先端部を欠損している。基部に挟りが多少認められるもので



第9図 寺ノ尾C遺跡表面採集遺物 (2/3)



第10図 寺ノ尾C遺跡第3地点表面採集遺物(1/3)

のである。重量0.30g、456番地表採。27は抉りが深く丁寧な二次加工を施した鍬形鍬である。先端部と片方の脚部を欠損しており、先端角度は $31^{\circ}$ で鋭利に尖っている。重量1.05g、396番地表採。28は使用による片方の脚部を欠損している。先端角度は $50^{\circ}$ で重量0.85g、396番地表採。29は先端部に丁寧な二次加工が施

されているためドリル的な使用も考えられる比較的大型の資料である。両脚部を欠損しており、先端角度は $45^{\circ}$ で重量1.40g、第2地点表採。30は器面の半分を欠損している石鍬である。重量は0.95gで479番地表採。31~33は基部の抉りが浅く三角形を呈している石鍬である。31は先端角度は $50^{\circ}$ で重量1.40g、455-2番地表採。32は先端角度は $48^{\circ}$ で重量0.55g、396番地表採。33は先端角度は $40^{\circ}$ で重量0.40g、第2地点表採。34は石鍬の未製品とも考えられる資料で二次加工も粗く先端部は丸く仕上げている。重量は1.50g、396番地表採。35は浅い抉りが施されており、先端部と両脚部を欠損している。重量は0.77gで397番地表採。36は比較的小型で丁寧な二次加工が施されており、両脚部を欠損している石鍬である。重量は0.20gで455-2番地表採。37は大型の石鍬であるが先端が丸く作られ側縁が鋸歯状を呈するため、石銛としての機能も持っている。重量は7gで第2地点表採。38は先端部のみで、397番地表採。39・40は脚部だけの資料である。39は396番地表採。40は386番地表採。41は加工痕のある剥片で石鍬の未製品の可能性もある。第2地点表採。42は使用痕のある剥片で456-3番地表採。

43~46は第3地点で採集された120点の中の実測可能な4点を図示した。120点のうち弥生土器は78点もあり、その資料の中には明らかにカメ棺の胴部と思われる資料も含まれている。43は凹石で最大長12cm、最大厚4.6cm、重量は925gである。44は口縁が内側にやや突き出す特徴を持つもので、高坏の資料と思われる。外面はヘラミガキ、内面ナデ調整が施されている。胎土には金雲母が認められる。45は胴部の突帯部分の資料で赤褐色を呈する。44・45とも形態的な特徴から「須玖式土器」の範疇に入るものである。46はカメ棺の底部立上りの部分である。外面はハケ目調整、胎土には長石・角閃石を含み、赤褐色を呈している。

## IV 姫神社遺跡の調査

### 1. 調査経過

平成4年7月、松浦市星鹿町北久保免字宮崎553ほか4筆において東京都練馬区練馬4-20-3在住の北川巻生氏による工事面積2,913㎡の開発工事があることを農業嘱託員をされていた北川益生氏より話があり、早速協議に入った。そして同年8月、文化財保護法の規定に基づく届出が提出された。協議の結果、確認調査費は9月補正に計上した。調査は平成4年9月28日～平成4年10月12日までの間行った。調査した面積は40㎡である。

姫神社遺跡は、松浦市の西部に位置する星鹿半島の付け根にあたる松浦港の北岸とその周辺一帯に分布している。本遺跡の西側約500mの地点には、長崎県の重要遺跡になっている縄文時代から中世期にかけての特に弥生時代を中心とする池田遺跡を望むことができる。

姫神社遺跡は、昭和41年に朝鮮半島の東三洞貝塚から出土する櫛目文土器と九州の曾畑式土器との関連性を研究するためにアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者

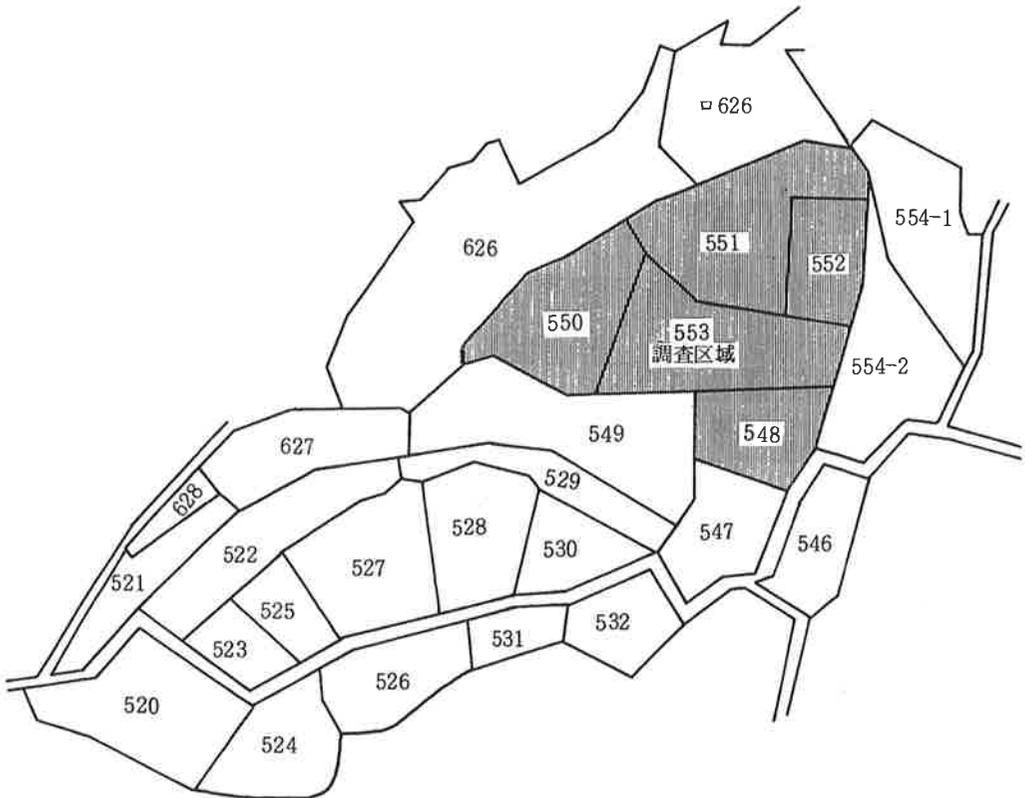


第11図 姫神社遺跡周辺図 (1/5,000)

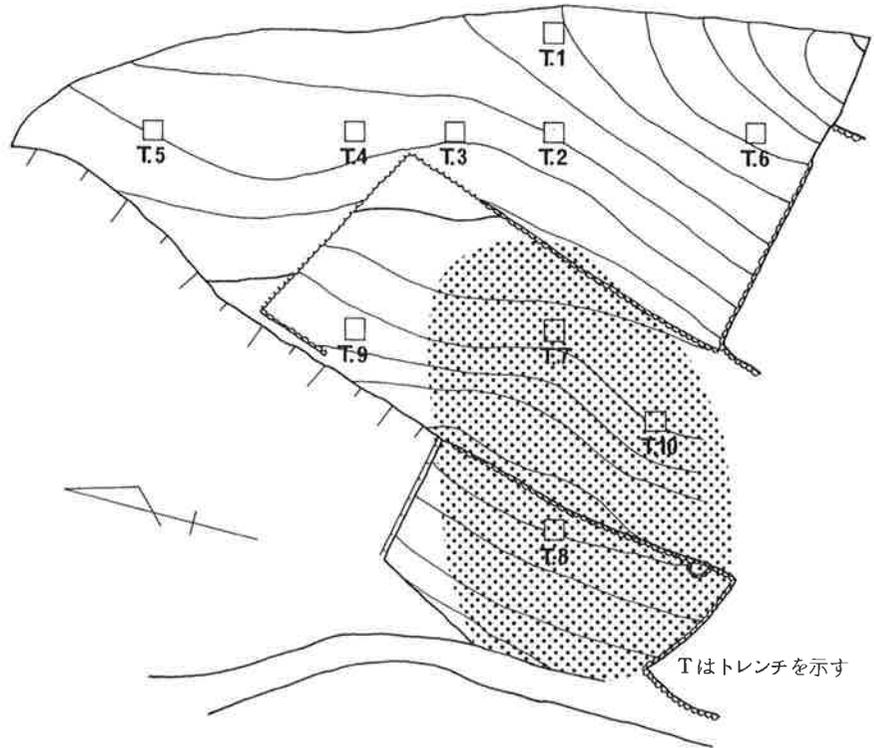
内藤芳篤氏（長崎大学教授）・吉崎昌一氏（北海道大学教授）の三氏を中心とする合同調査が行われている。調査は4 m×4 mのトレンチ1ヶ所、4 m×2 mのトレンチ1ヶ所、1 m×1 mのトレンチ3ヶ所の合計27㎡が調査されている。調査地点は姫神社の境内と北側の水田地であった。調査では縄文早期の姫式土器（塞ノ神式か）・前期の轟B式土器・曾畑式土器と中期の阿高式土器、石鏃・石錘・石匙・石斧などが約1万点出土しており、長崎県下でも重要な遺跡であることが確認されている。古墳時代では貴船神社古墳より須恵器の提瓶と土師器が採集されている。中世では鎌倉時代後期におこった文永の役（1274年）・弘安の役（1281年）の元寇に関連する史跡として千人塚や防塁（?）、地名等も残っている。

調査は、遺跡の範囲と土層の状況を確認することを目的とし、工事予定地区の2,913㎡を対象とした。この予定地区内を、2 m×2 mの方眼を基本とするトレンチを10ヶ所設定し、40㎡の発掘調査を行った。10ヶ所のトレンチのうちT1～T6及びT9に関しては、地表面下の約15cmから60cmまで掘り下げるが、遺物の包含層は検出されず耕作土及び攪乱層から若干の遺物が出土している。

姫神社遺跡は、昭和56年に長崎県教育委員会が行った分布調査によりかなり広い範囲に分布していることが確認されていた。今回の調査対象となった部分は、昭和41年の発掘調査地点より北東へ約100mの標高約16mから25mの丘陵地で、以前は畑地として利用されていた土地である。



第12図 姫神社遺跡周辺字図



第13図 姫神社遺跡調査区設定図 (1/750)

## 2. 土層及び出土遺物 (第14図～第16図)

### 土層

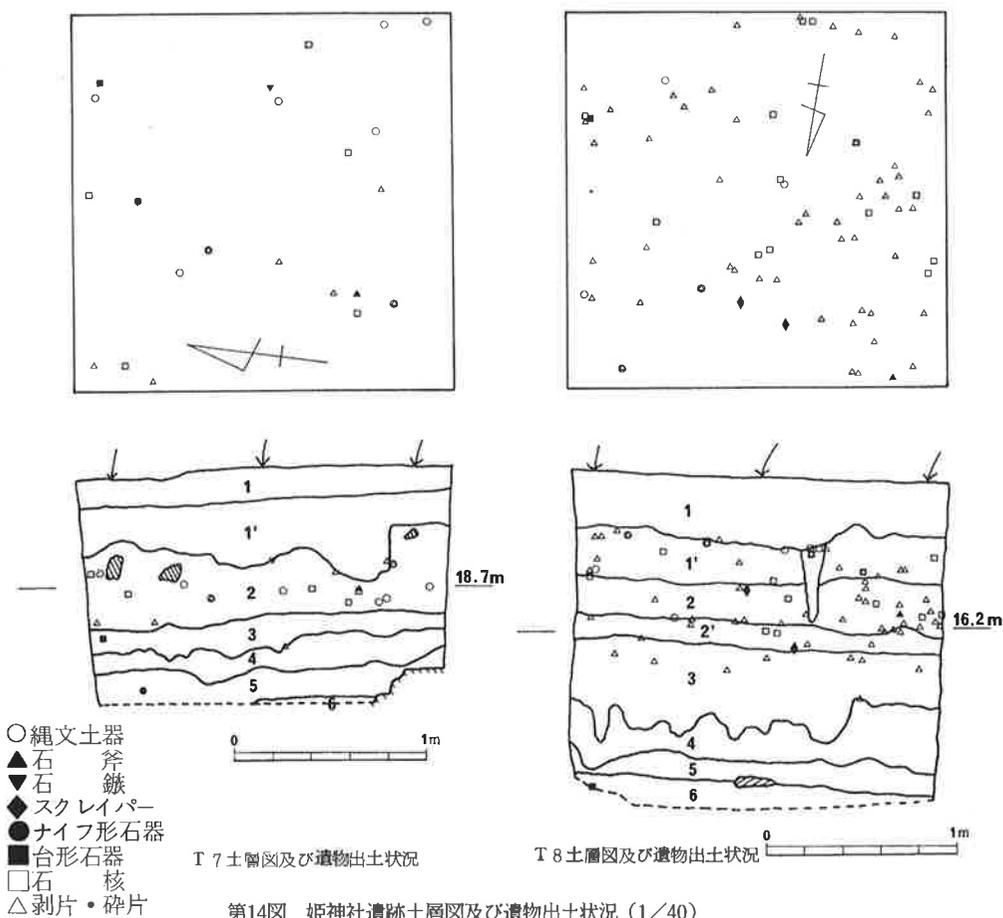
工事予定地区内は、東から西に傾斜した標高16mから25mの畑地であり、T 1・T 4・T 5・T 9では約15cmの耕作土のすぐ下に地山である玄武岩風化土層があり、包含層の検出はできなかった。T 2・T 3・T 6では耕作土の下は攪乱を受けており、この層から遺物が出土している。本来は薄い包含層があったのではなかろうか。比較的良好な包含層が残っていたトレンチとしてT 7・T 8・T 10がある。包含層はT 7・T 8から西側に沿って包含層の厚みも増し、谷状に傾斜していることが確認された。層位はI層は表土で灰褐色粘質土層で攪乱を受けている部分をI'層とした。色調は灰茶褐色である。II層は淡褐色粘質土層であるが、T 8では色調で2分される。上層が暗褐色で下層の淡褐色よりやや黄味を帯びている。III層は茶褐色粘質土層でやや黒味を帯びて非常に固くしまっている。T 8ではT 7より厚く堆積している。IV層は褐色粘質土層でしまっている。V層は明褐色粘質土層で小さい砂粒の粒子を含んでいる。VI層は赤褐色粘質土層である。T 8のIII～VI層は土壤サンプルを行っている。T 10もI層の灰褐色粘質土層の下は攪乱を受けたI'層がある。II層は暗褐色粘質土層でIII層は褐色粘質土層で玄武岩の風化した小礫粒を含んでおりしまっている。T 7・T 8トレンチでは、遺物も玄武岩

風化土層である黄褐色の直上である赤褐色の粘質土層より出土している。

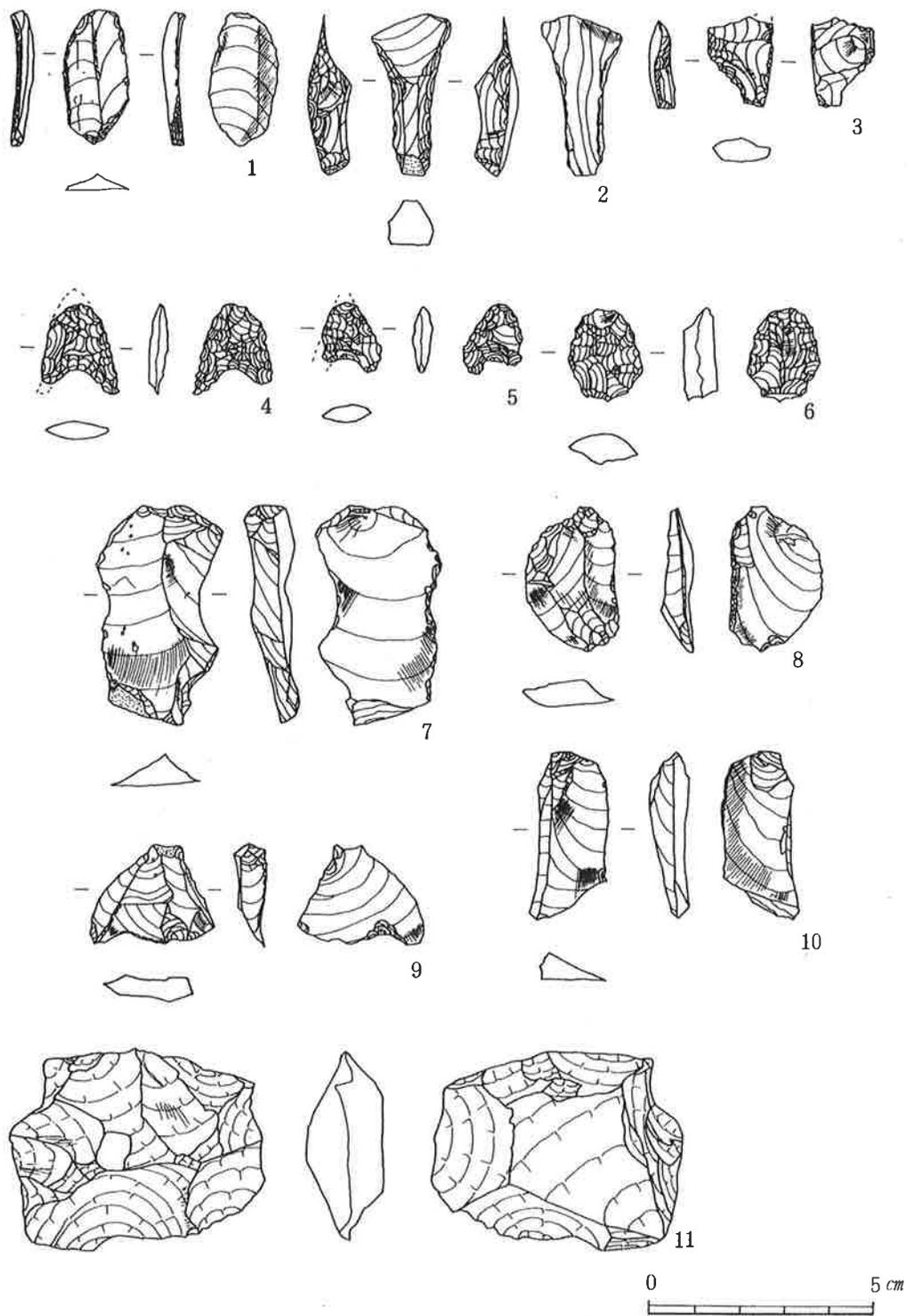
### 出土遺物 (第15図・第16図)

今回の調査によって10ヶ所のトレンチから332点の遺物が出土している。T4～T6では遺物の出土はなかった。すべてのトレンチから黒曜石製剥片が出土しており、特に遺物の出土が多かったのがT7・T8・T10である。T7からは黒曜石製石鏃、磨製石斧、縄文土器、黒曜石製ナイフ形石器・台形石器・剥片など34点が出土している。T8では縄文土器、打製石斧、黒曜石製剥片・石核など114点が出土している。縄文土器ではすべて細片であったため時期の決定は難しいが、胎土に滑石を混入した前期から中期の土器2点と滑石を含まない土器3点が出土している。T10からは黒曜石製剥片など18点が出土している。この調査区からは縄文土器の出土はなかった。

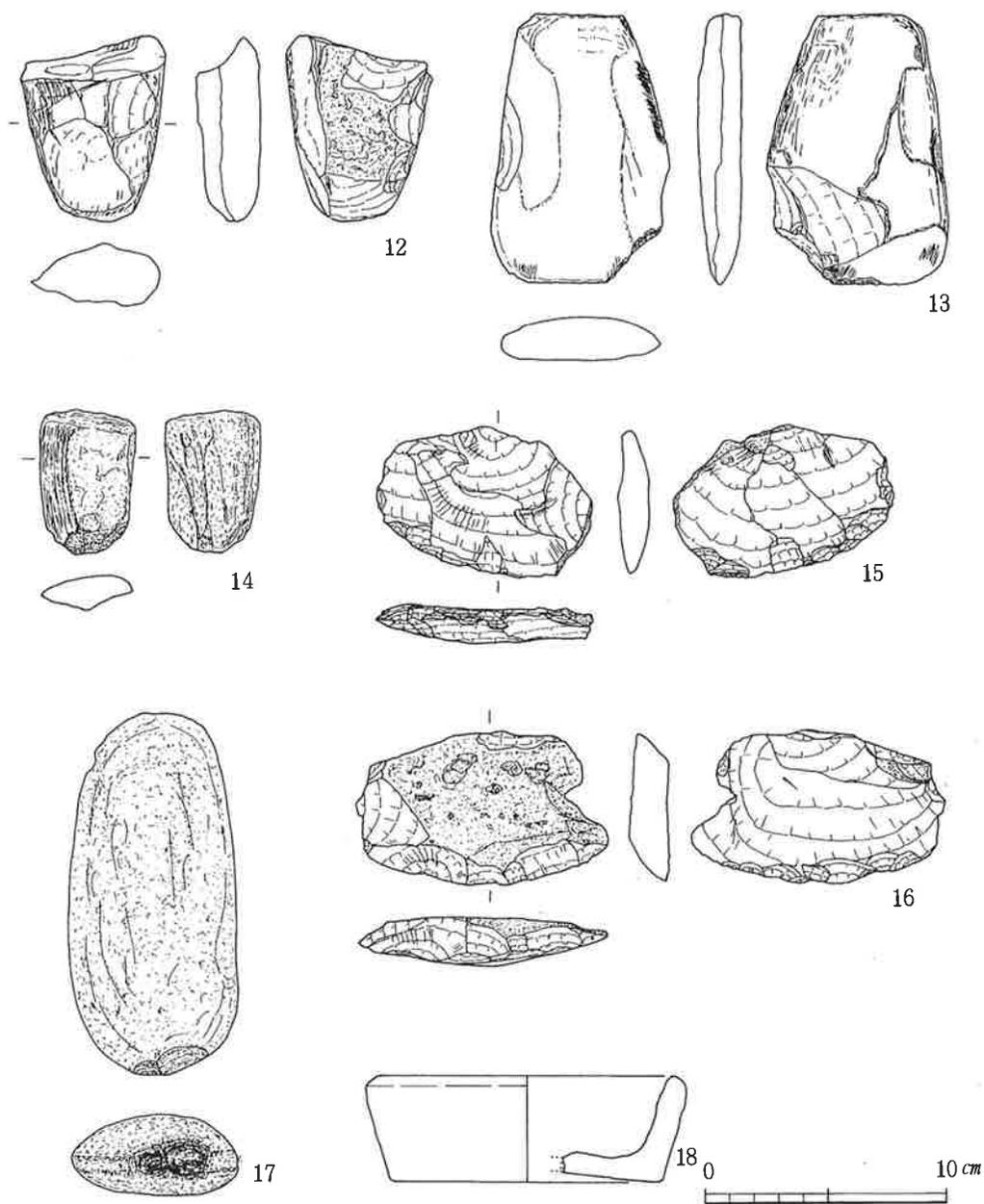
1～3は旧石器時代の石器で、それ以外は縄文時代の石器・土器である。1～10は黒曜石製で、11は安山岩製である。1はナイフ形石器で、縦長剥片を利用し両側縁部には丁寧に裏面よりブランディング加工を施している。断面三角形を呈し、刃部には使用痕が認められる。最



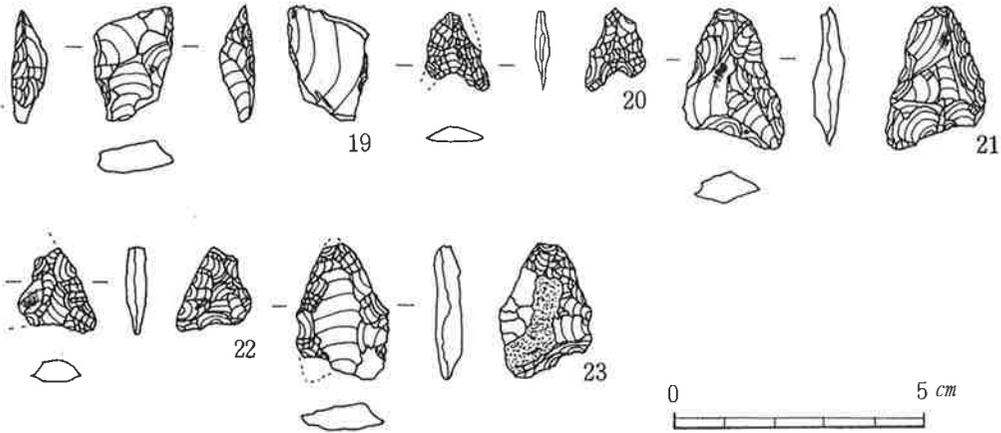
大長3.0cm、最大幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.75gである。T7V層より出土している。2・3は台形石器である。2は厚い横長剥片を素材とする細長の台形石器である。斜交する刃部を呈し、刃部に対して器長が長いもので、裏面より鋭角にブラント加工を施している。最大長3.6cm、最大幅1.8cm、厚さ1.0cm、重量3.85gである。T7III層出土である。枝去木型系統に入る。3は横長剥片を素材とし、右側縁は折断し、左側縁には抉りを入れている。刃部の右肩を欠損している。刃部には使用痕が認められる。T8VI層出土。原の辻型のタイプに入るものである。最大長2.0cm、最大幅1.4cm、厚さ0.5cm、重量1.40gである。4・5は石鏃である。いずれも先端部と片方の脚部を欠損している。4は重量1.0gでT7II層の出土である。5は先端角度は48°重量は0.7gでT8I'層出土である。6は小さくて厚い剥片を利用して丁寧な二次加工を施し円形状を呈するラウンドスクレイパーである。先端部は丸味を帯び端部を欠損している。重量は2.25gでT8I'層出土である。7は縦長剥片の素材をそのまま利用した使用痕のある剥片である。使用痕は両側縁部に認められる。最大長4.9cm、最大幅2.8cm、厚さ1.1cm、重量10.2gである。T7III層の出土。8は幅広剥片を素材に側縁部に使用痕のある剥片である。最大長3.25cm、最大幅2.1cm、厚さ0.75cm、重量4.0gである。T10I'層の攪乱層より出土。9は不定形の剥片を利用した使用痕のある剥片である。最大長2.20cm、最大幅2.7cm、厚さ0.7cm、重量2.55gでT7III層出土である。10は全面パティナが著しい縦長剥片である。最大長3.7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.9cm、重量3.60gでT7II層出土である。11は石核で両面とも寸づまりの剥片を剥ぎ取っている。T8II層出土である。12~14は石斧である。12は打製石斧で上半部は欠損している。石質は安山岩製であるため風化が著しいが石斧としての体面は残っている。重量は145gでT8II層出土である。13はやや撥状になる扁平な片刃の磨製石斧である。硬質砂岩を素材としており、全面研磨であるが風化が著しく、表面が黄色に変色している。長さ11.3cm、最大幅7.5+ $\alpha$ cm、厚さ1.8cmで、重量は217.5gである。T7II層出土である。14はT10の表土から出土した安山岩系の小型の石斧である。長さ5.9cm、最大幅4.05cm、厚さ1.5cmで、重量は42.5gである。15・16は安山岩製のスクレイパーである。15は両面ともに横剥ぎ底辺はゆるくカーブをし、両面に刃がつけられている。長さ6cm、最大幅9cm、厚さ1.7cmで、重量は85.5gである。T8II層出土。16は表面に自然面を有し、横長剥片を素材とするスクレイパーである。最大長6.4cm、最大幅10.5cm、厚さ2.1cmで、重量は129.5gである。T8II層出土。17は硬質砂岩製敲石である。縦に長い棒状の自然の円礫をそのまま使用している。両端部には敲いた痕跡を残して丸くなっている。最大長15cm、最大厚3.4cmで、重量は497gである。T10II層上面出土である。調査による出土は本資料が1点である。18は出土した土器の中でも実測可能な土器をあげた。色調は内外面とも茶褐色を呈し、胎土は粗く石英・長石・角閃石と若干の金雲母を含んでおり、内外面とも無文である。口径12.2cm、器高4.4cm、底径11.2cmで、器形は坏形を呈している。焼成は良くない。



第15図 姫神社遺跡出土遺物 (2/3)



第16図 姫神社遺跡出土遺物 (1/3)



第17図 姫神社遺跡表面採集遺物 (2/3)

### 3. 表面採集遺物 (第17図)

19～23は表面採集した黒曜石製の石器である。19は台形石器である。全面パティナが著しく横長剥片を素材としている。断面四角形状を呈し、ブラントニング加工は裏面より鋭角に行われている。百花台型タイプの資料である。最大長2.3cmで、最大幅1.6cm、厚さ0.7cmで、重量は2.35gである。551番地より採集。20～23は打製石鏃である。20は先端部と片方の脚部を欠損している小型の石鏃である。二次加工は丁寧である。重量は0.45gで527番地より採集。21は側縁部・先端部に粗い二次加工が施されており、抉りも粗く行われている。重量は2.55g、551番地の採集である。22は二次加工は丁寧であるが先端部と片方の脚部を欠損している。重量0.9gで530番地の採集である。23は縦長剥片を素材に両側縁部に二次加工を施している。表面には自然面を有している。重量は2.75gで531番地よりの採集である。

## V ま と め

本報告には、平成4年度に発掘調査及び確認調査を行った遺跡の中でも、寺ノ尾C遺跡・姫神社遺跡の確認調査事業について報告することができた。

寺ノ尾C遺跡は、平成元年度について第2次調査であった。第1次調査は竜尾川地区県営圃場整備事業の一環として行っており、ナイフ形石器を主体とする包含層が検出されている。今回の第2次の調査では24ヶ所の調査区を設定したが包含層自体の検出ができず攪乱層あるいは表面採集にて台形石器・細石刃・細石核が採集されており、以前から松浦高校郷土社会部によって採集されていた遺物と同じ結果であった。これから考えてみると寺ノ尾C遺跡第4地点は市道横久保・白岳線の道路から396番地を中心とする比較的狭い範囲に分布していたものと考えられる。遺物からはナイフ形石器文化終末期の段階の百花台型タイプの台形石器から細石刃・細石核の細石器文化期へと続いている。半舟底形細石核は周辺に良好な発掘調査例がないためその内容も不明な点が多いが形態・製作技術上から、土器共伴の資料と大差がないため本来は土器を伴っていた可能性もある。編年的な位置づけが今後の課題である。

姫神社遺跡は、昭和41年について第2次調査であった。本遺跡は良好な縄文前期の遺跡として認められていたところであるが、今回の調査では残念ながら土器片は細片ばかりであり、やや的はずれの感であった。しかし、今まで確認されていなかった後期旧石器時代終末期におけるナイフ形石器文化期の遺物が出土したことは大きな成果であった。遺物にはナイフ形石器1点、台形石器では原の辻型タイプと枝去木型タイプの資料各1点と少なかったが、表採では百花台型タイプの台形石器1点も採集されている。遺跡自体はまだ周辺に広がっていると思われる今後の調査によっては台形石器の変遷がたどれるような遺跡であることが確認されたことも大きな成果の一つでもあった。今後の周辺における調査に譲りたいと思う。調査では、8トレンチと10トレンチにて遺構及び遺物が集中しており、本工事部分の約1,200㎡(第13図参照)に遺跡が分布している可能性があると思われる。このためこの部分については盛土にて保存が図られている。

### 参考文献

1. 萩原博文編 『津吉遺跡群発掘調査報告書』 平戸市教育委員会 1986



# 圖 版

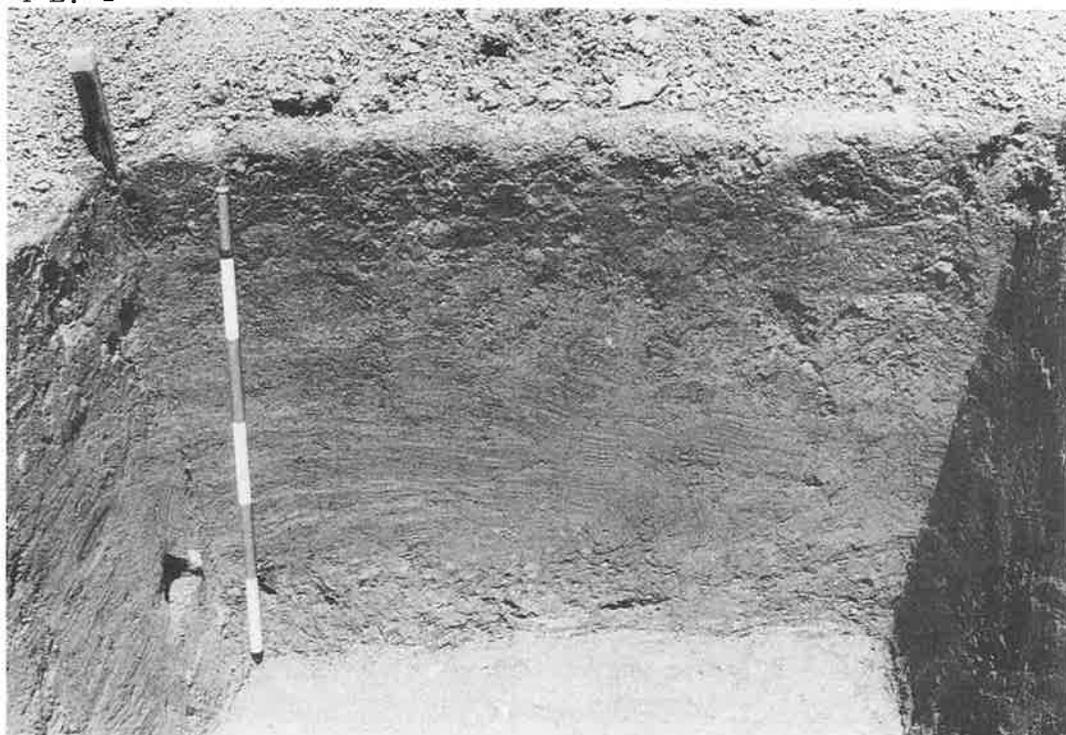




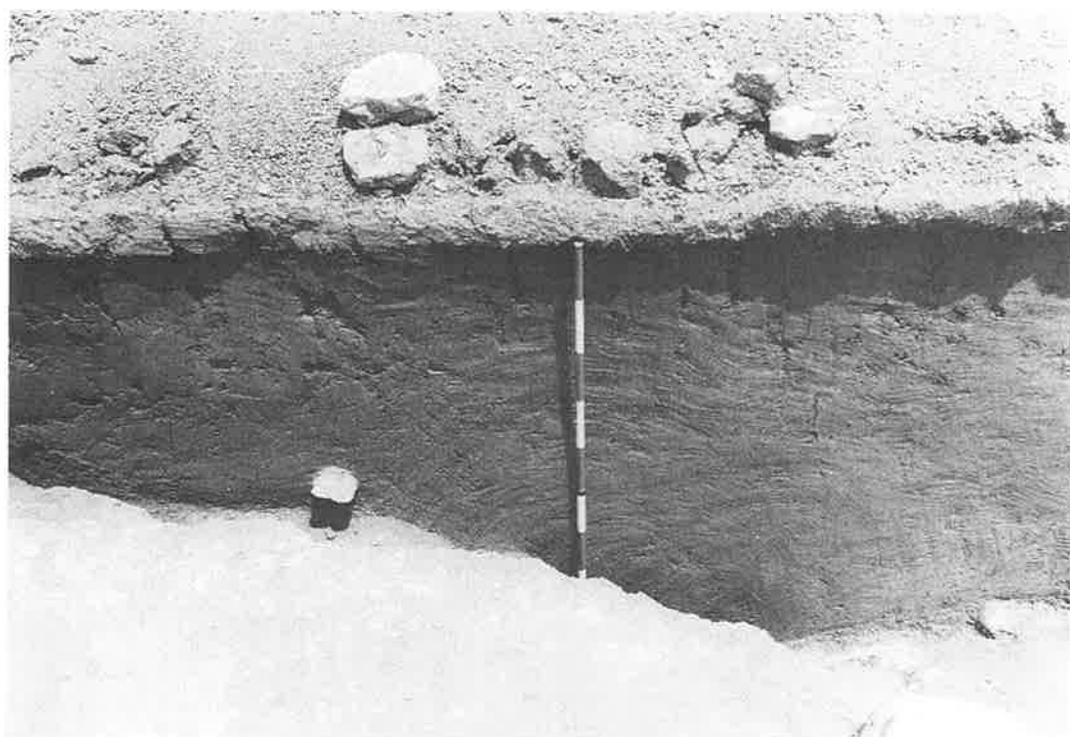
寺ノ尾C遺跡遠景（南より）



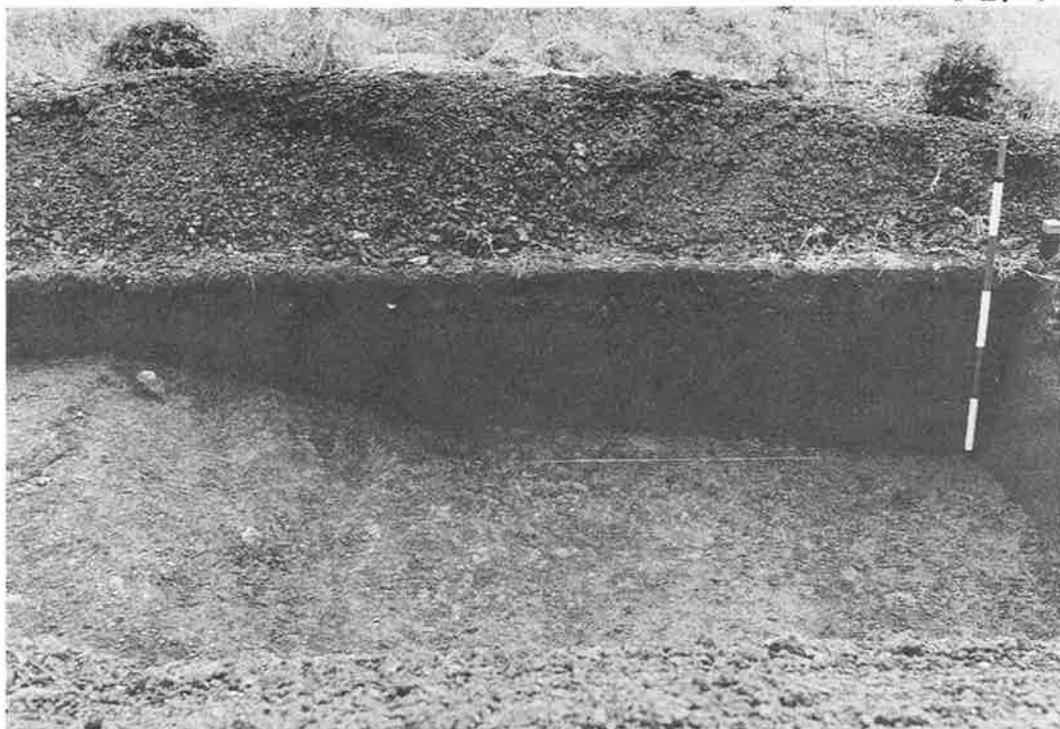
寺ノ尾C遺跡調査風景



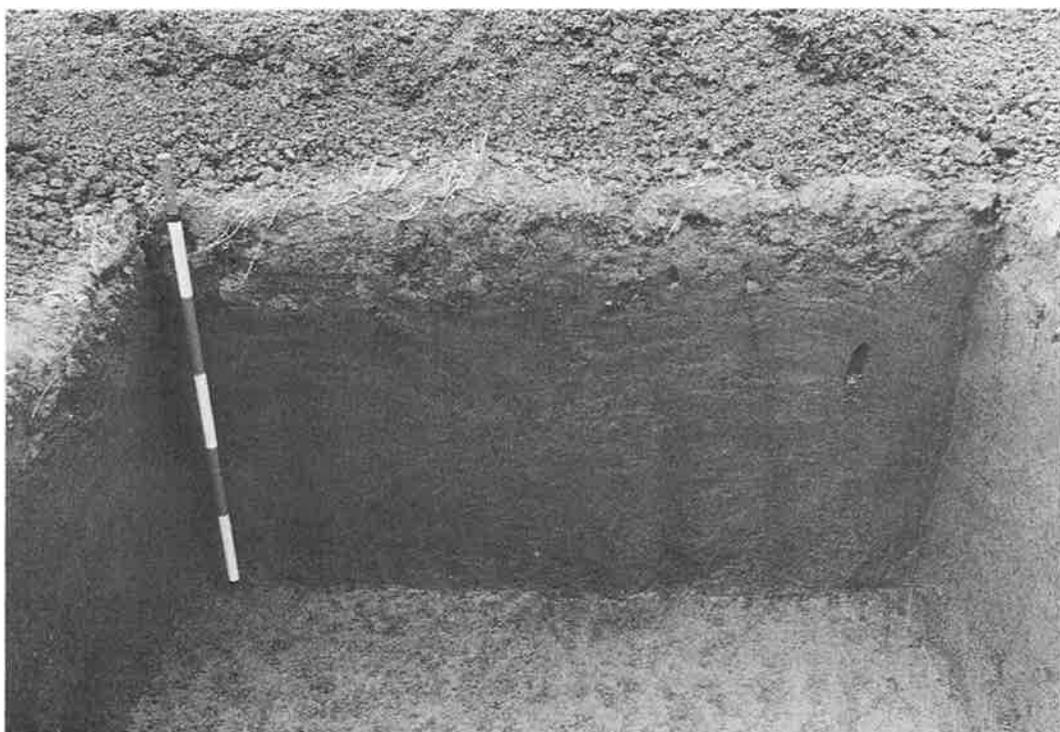
寺ノ尾C遺跡T5土層状況



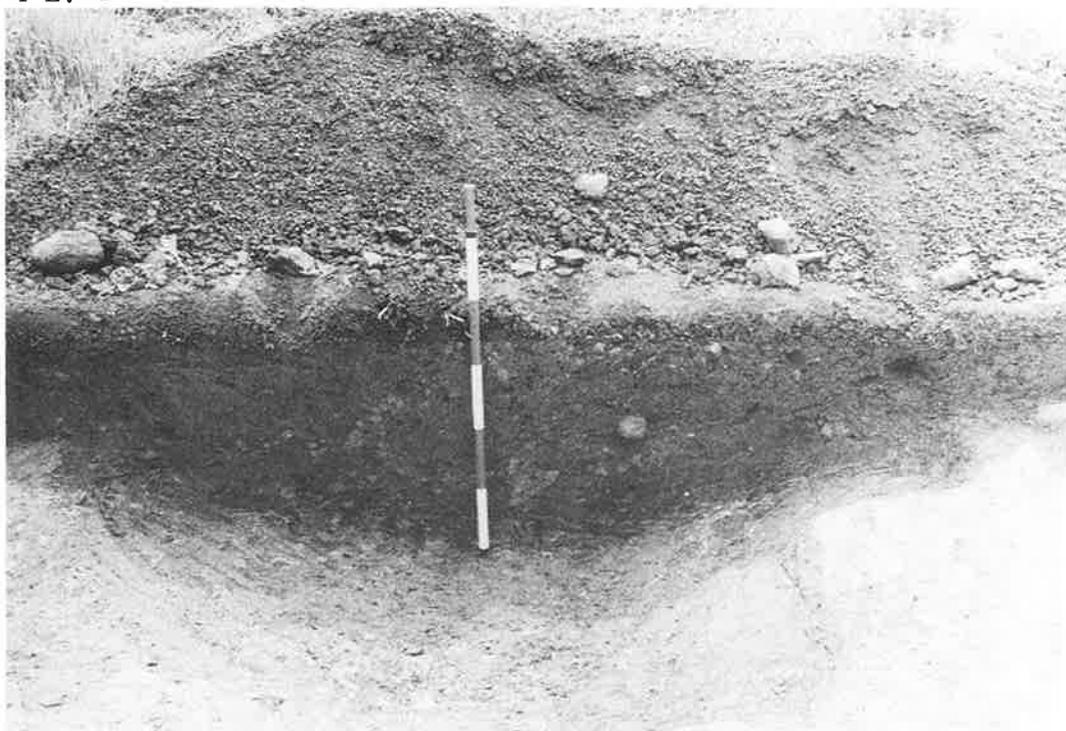
寺ノ尾C遺跡T9土層状況



寺ノ尾C遺跡T10土層状況



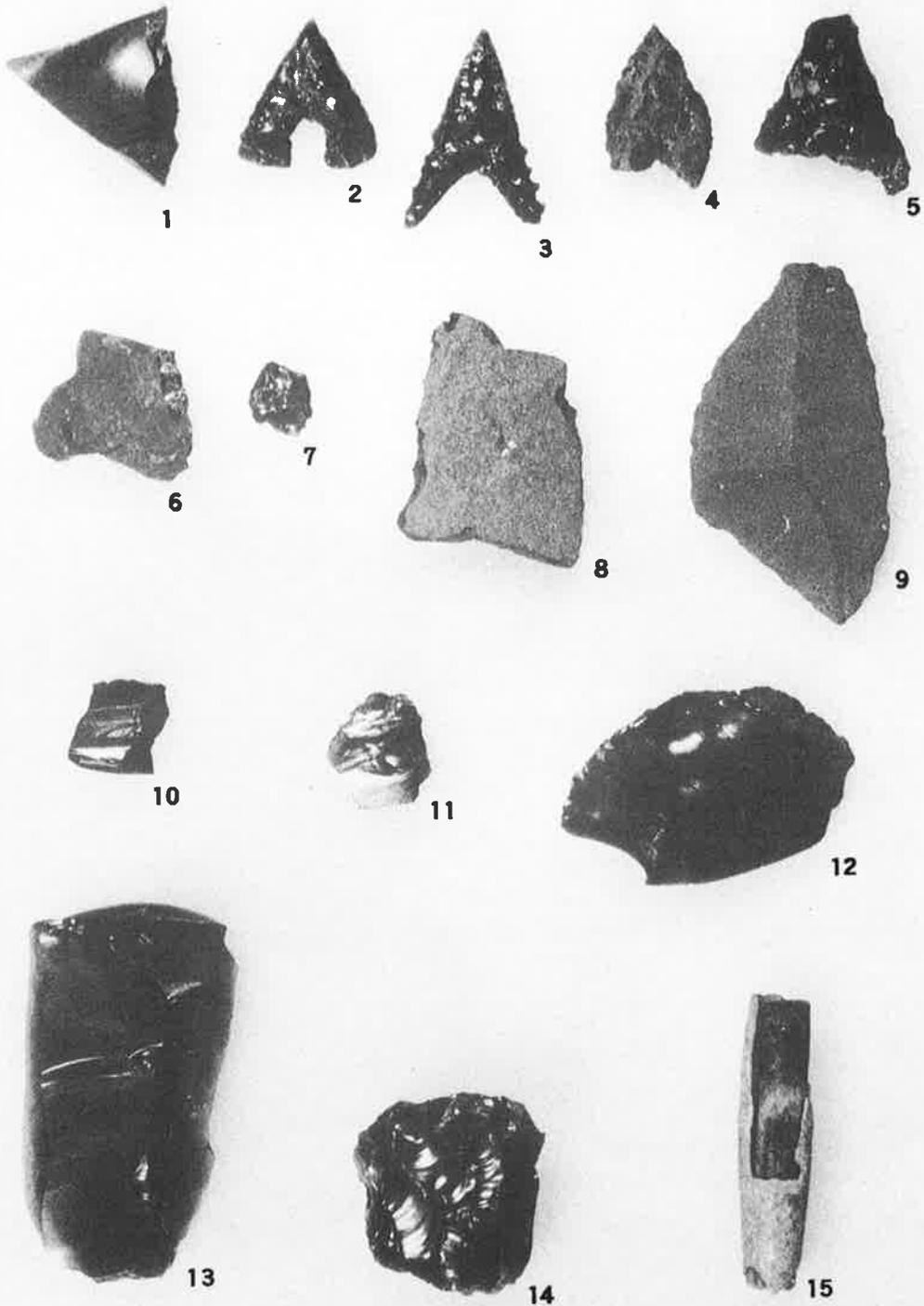
寺ノ尾C遺跡T17土層状況



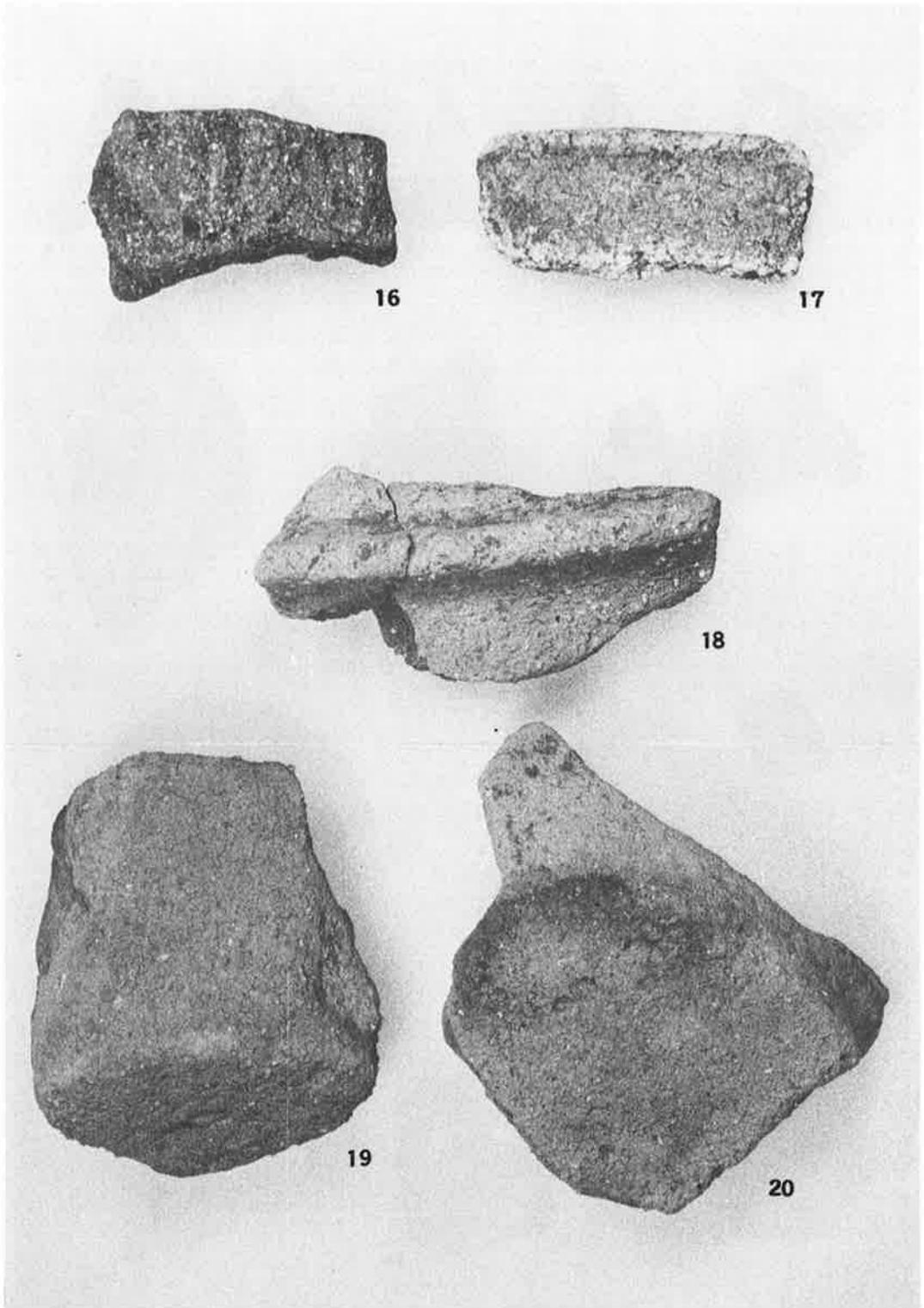
寺ノ尾C遺跡T22土層状況



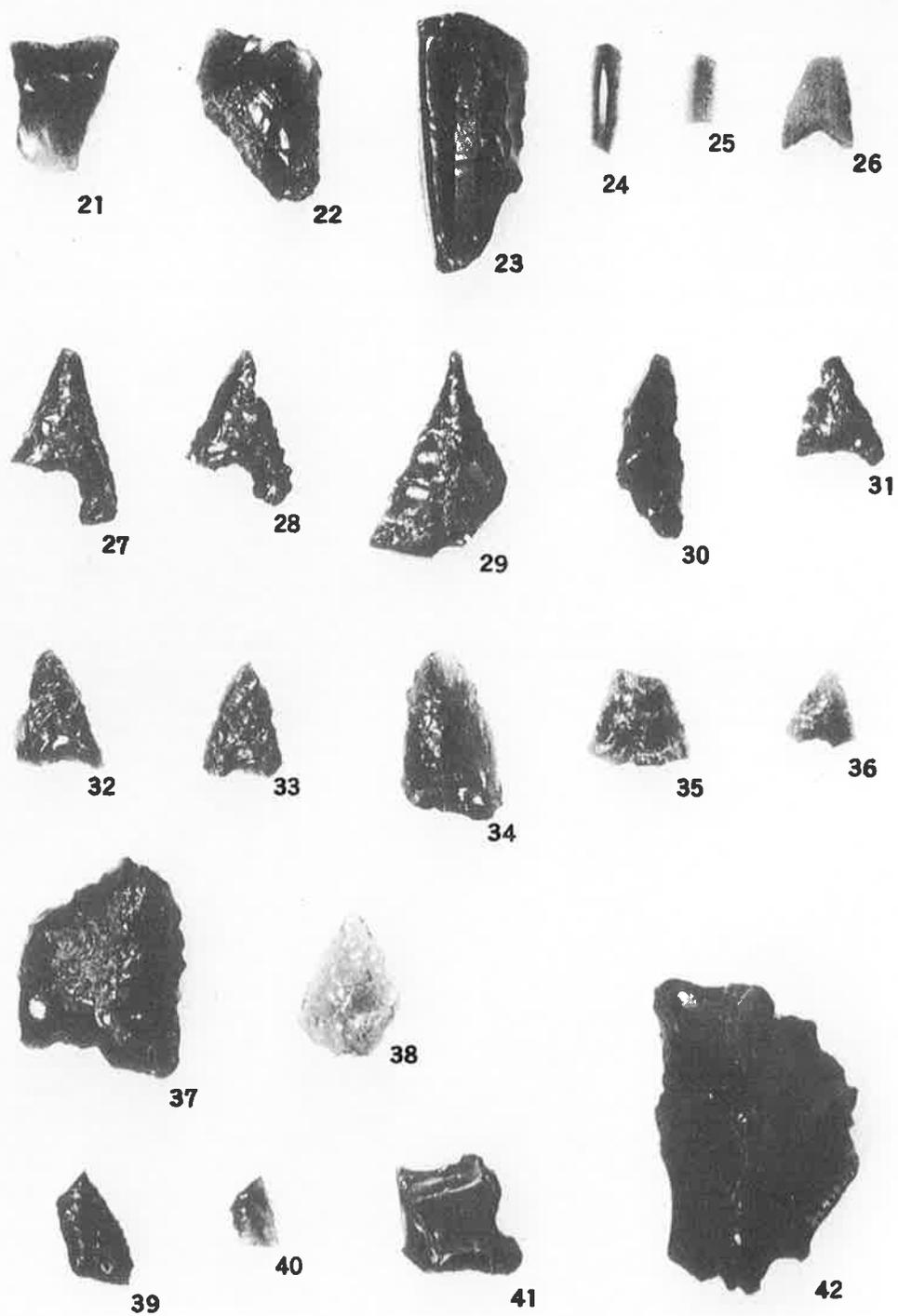
寺ノ尾C遺跡T23土層状況



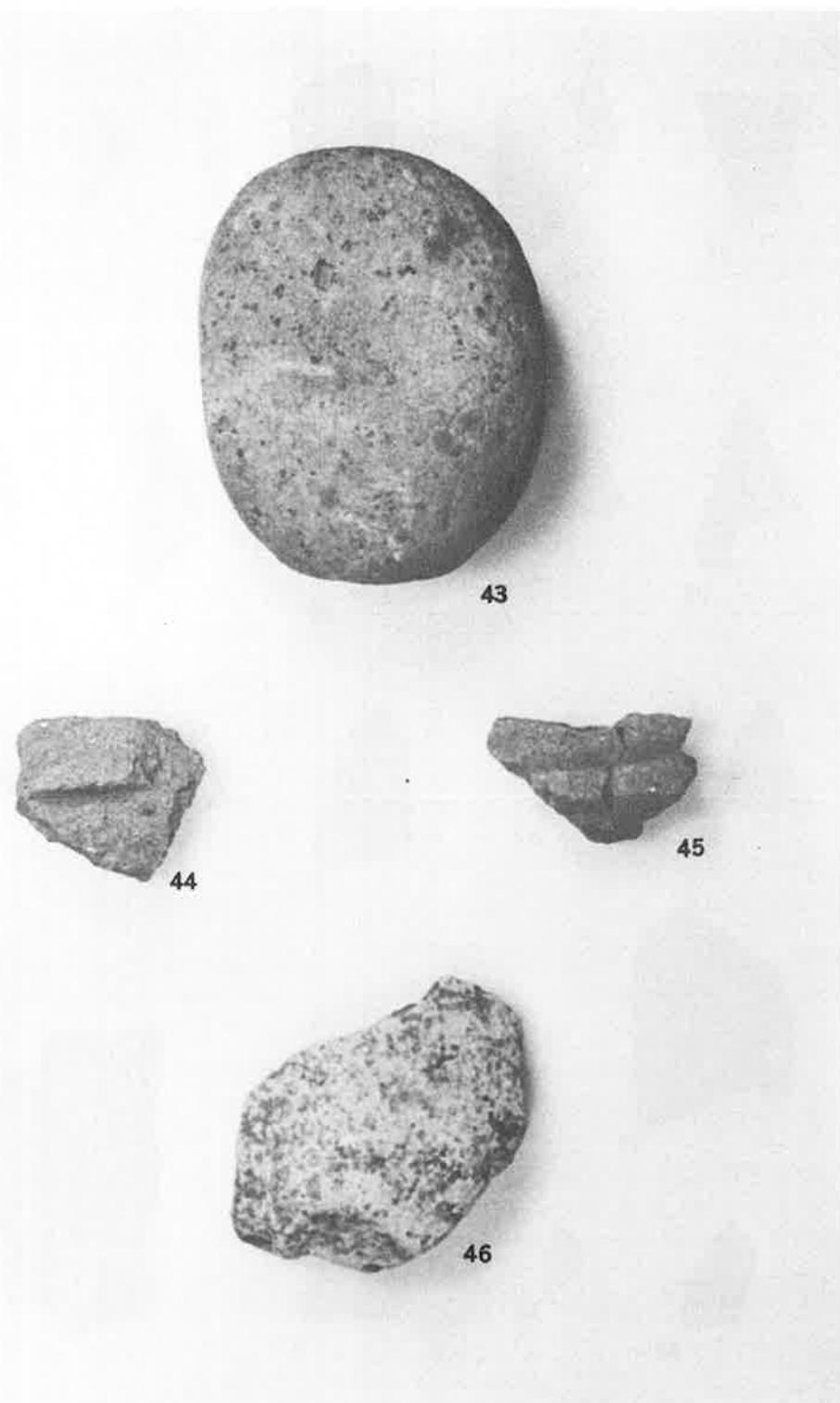
寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/1)



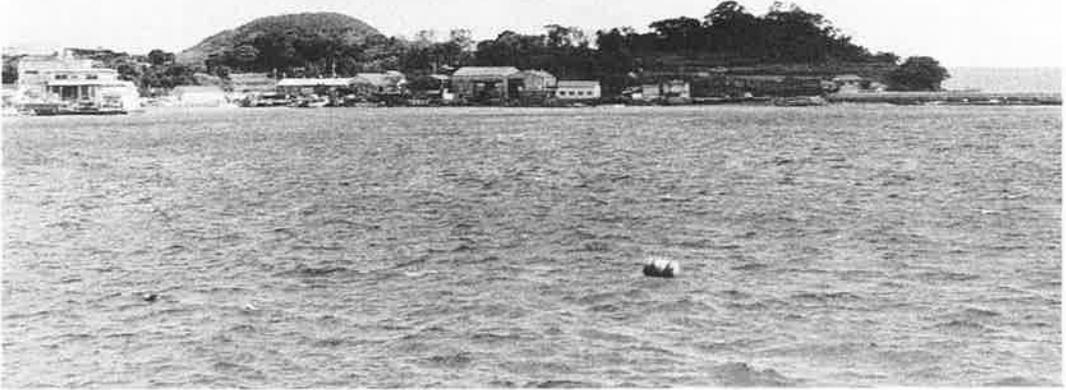
寺ノ尾C遺跡出土遺物 (1/1)



寺ノ尾C遺跡表面採集遺物 (1/1)



寺ノ尾C遺跡第3地点表面採集遺物(1/2)



姫神社遺跡遠景（南西より）



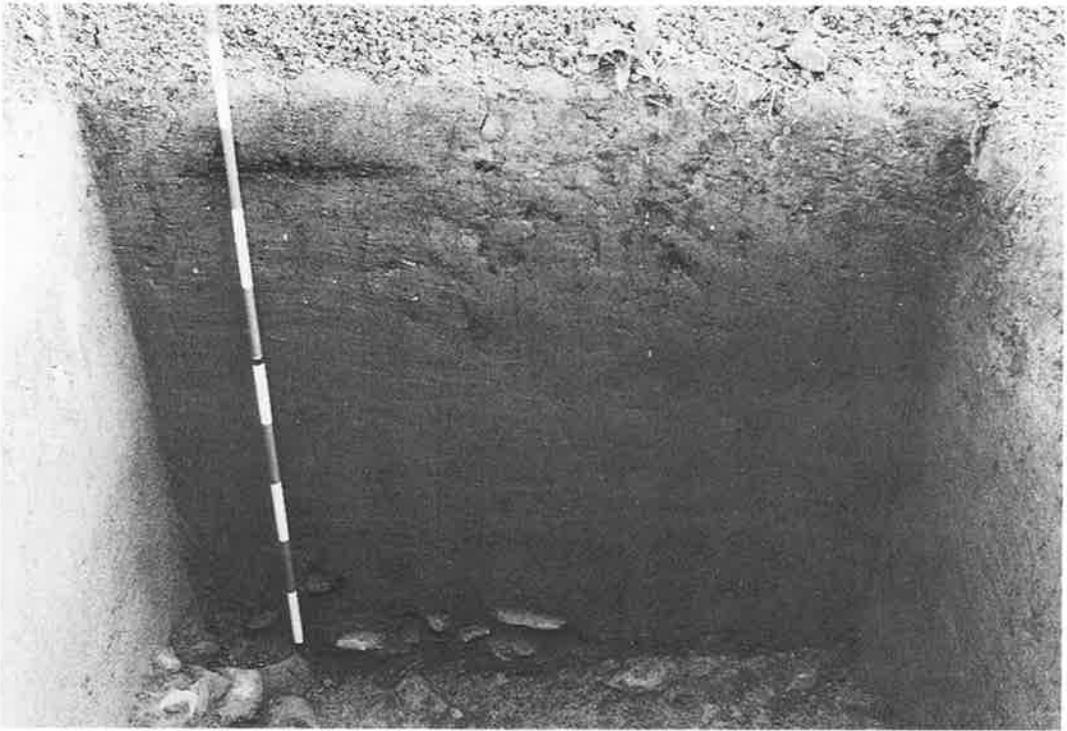
姫神社遺跡調査風景



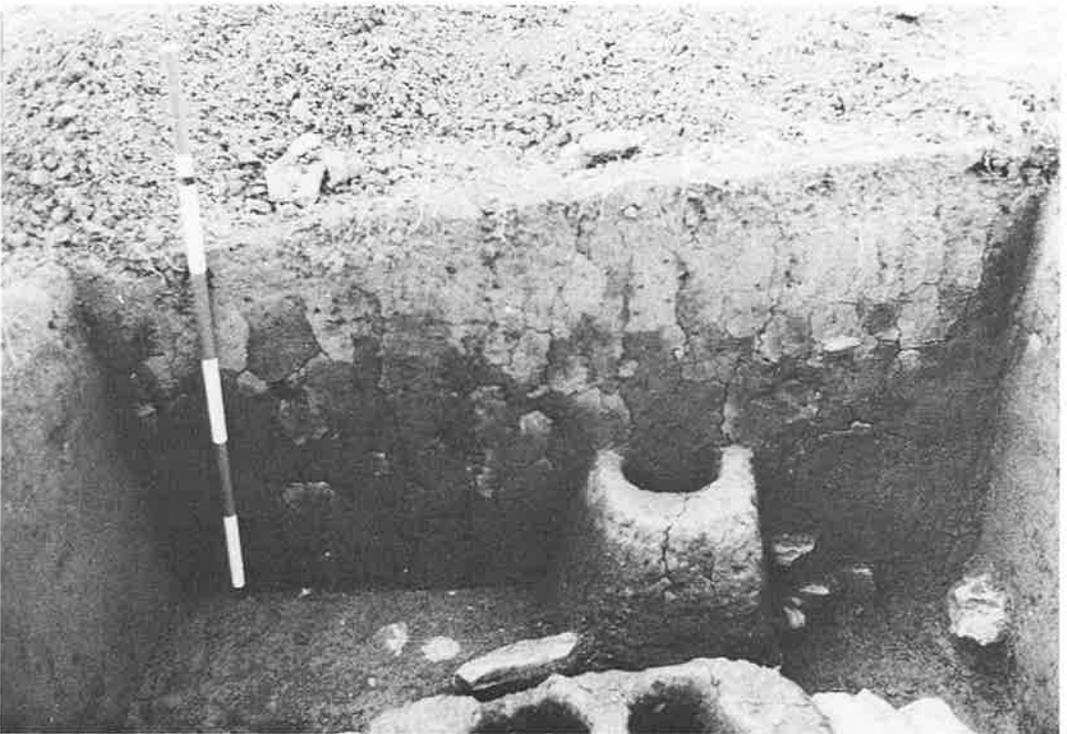
姫神社遺跡T2土層状況



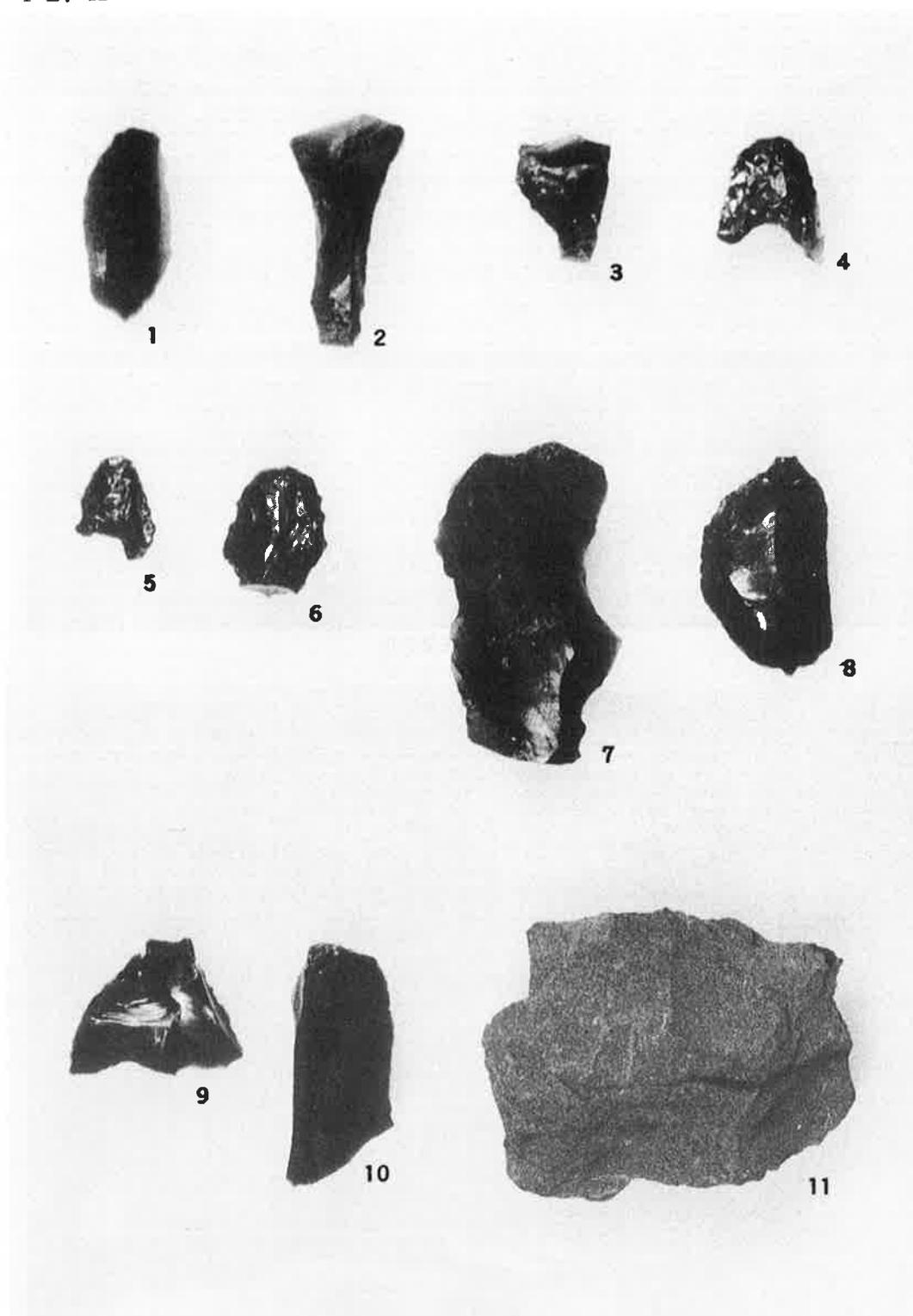
姫神社遺跡T7土層状況



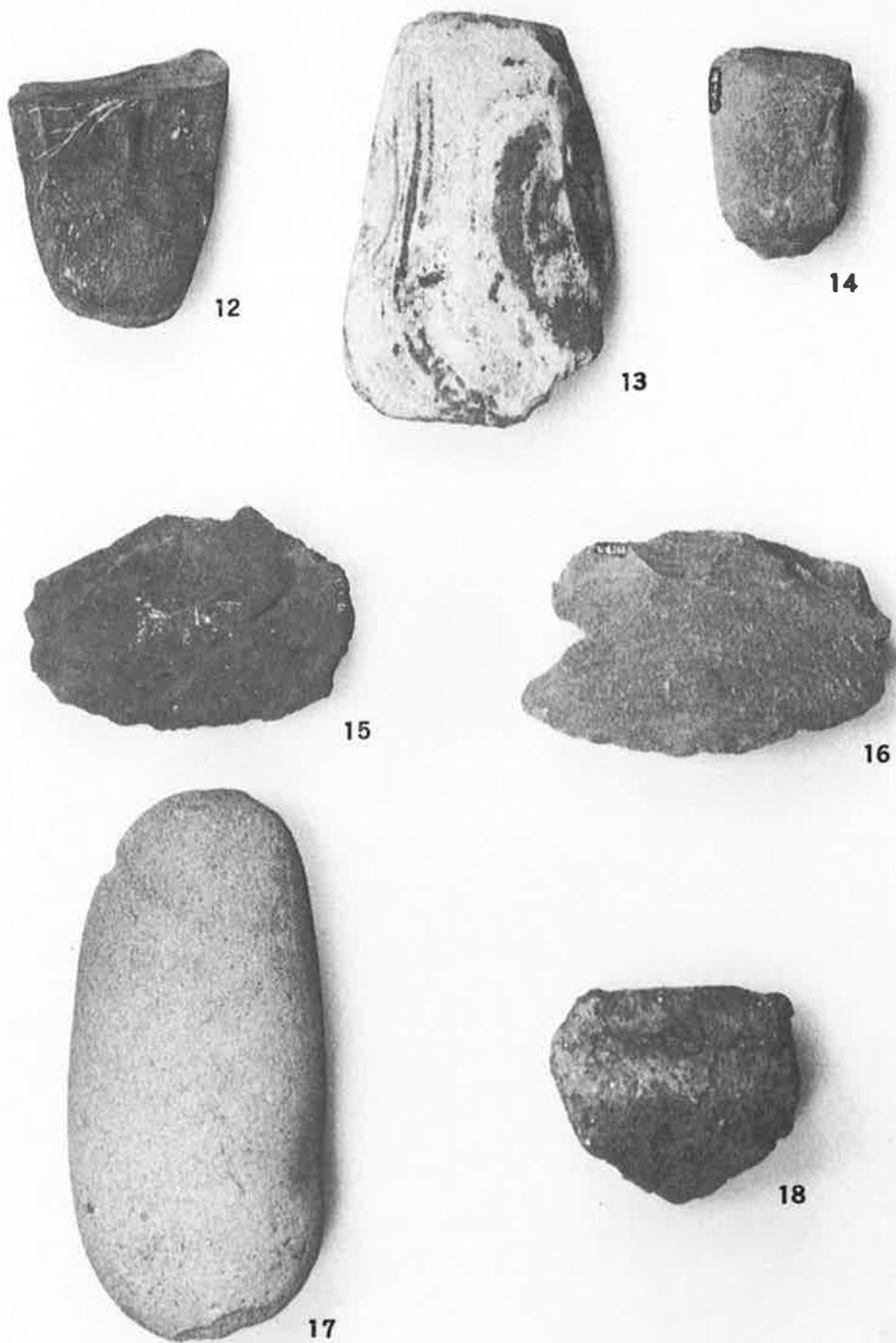
姫神社遺跡T 8 土層状況



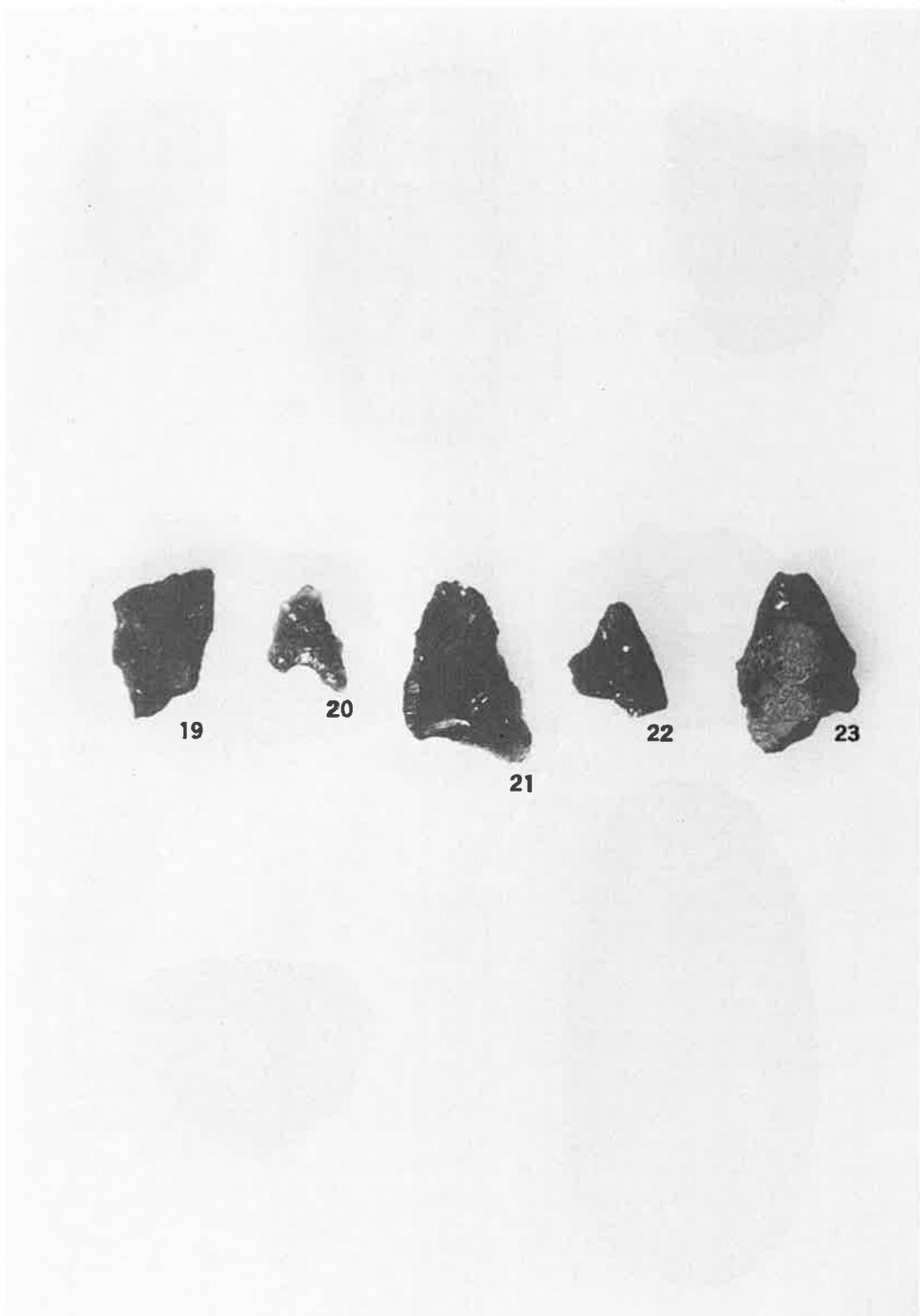
姫神社遺跡T 10 土層状況



姫神社遺跡出土遺物 (1/1)



姫神社遺跡出土遺物 (1/2)



姫神社遺跡表面採集遺物 (1/1)



松浦市文化財調査報告書 第11集

## 松浦市内遺跡確認調査(1)

発行 松浦市教育委員会  
長崎県松浦市志佐町里免365

印刷 (有)エスケイ印刷

